

仙台市文化財調査報告書第306集

若林城跡

—第6次・第7次発掘調査報告書—

2007年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第306集

若林城跡

—第6次・第7次発掘調査報告書—

2007年3月

仙台市教育委員会

序 文

若林城は仙台藩祖伊達政宗が仙台城築城の後に晩年を過ごした城といわれております。しかし百万都市である仙台市の区名となっているにも関わらず、これまでの調査で若林城がどのような城であったかを明らかにすることは容易ではありませんでした。そのような中、刑務所など矯正施設の老朽化と収容者の急増という全国的な流れにより、宮城刑務所の全体改築計画が持ち上がりました。これに伴い平成16年度から始まった事前調査において、城の西側で複数の礎石建物跡や石敷遺構が発見され、これらの遺構が城の表御殿の一部であるという、これまでに無い大きな成果をあげることができました。仙台市教育委員会は遺構の重要性から、宮城刑務所をはじめ関係部局との間で保存を前提とした協議を重ねた結果、建物の基礎構造の変更により、若林城の遺構は無事保存される事となりました。

今回の調査は城の実態を解明する学術的なものであるのに加え、今後も続く施設建設の可否を判断するためのデータ収集を目的として実施した国庫補助事業です。調査では若林城の遺構を初めて発見した第5次調査とは別な建物跡などが発見され、遺構が広範囲に残っている事が確認されました。さらに若林城以外の遺構の発見により、この遺跡の多面性を知る結果となりました。

仙台の基礎を築いた伊達政宗への関心は研究者のみならず多くの市民が抱くところであり、以上のことからも、本市としましては今後、若林城の遺構の保存に取り組んでまいりたいと思っております。さらに遺跡の重要性は、近年、国史跡に指定されました仙台城跡や郡山遺跡に匹敵するもので、今後は若林城跡の指定に向け努力する所存でございます。そのためにも本報告書が市民の皆様に幅広く活用され、文化財保護活動と新たな郷土の理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに報告書の刊行に際し、多くの方々のご協力を賜りましたことに対し深く感謝申し上げる次第です。

平成19年3月

仙台市教育委員会

教育長 奥山 恵美子

例　　言

1. 本書は平成17年度と18年度に実施した国庫補助事業による若林城跡第6次調査と第7次調査の発掘成果を収録したものである。第7次調査には平成16年度に実施した第4次調査の一部も含まれており、本書の内容は既に刊行した「若林城跡第4次発掘調査報告書」の内容に優先するものである。
2. 各種資料や出土遺物の整理作業、ならびに本書の作成作業は文化財課調査係の佐藤淳が行なった。
3. 調査や報告書作成時の図面・写真・出土遺物などの資料や備記録は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 第1図は国土地理院発行の5万分の1地形図「仙台」を、第2図は宮城刑務所作成の現況図を修正使用した。
2. 上層記に記載した土色は「新版標準土色帳」(小山・竹原: 1997)に基づいている。
3. 調査の際の平面基準は世界測地系による平面直角座標とした。
4. 遺構
 - ・遺構名については以下の略号を使用し、後に続く番号は第5次調査検出遺構の番号に続けて付した。
S B : 碓石建物跡 S I : 竪穴住居跡 S K : 上坑 S D : 溝跡 S X : 性格不明遺構
P : 竪穴・小穴 小溝群 : 小溝状遺構群
 - ・上層名は基本層位をローマ数字、遺構内堆積層位を算用数字で表記し、細分層にはその後にアルファベットの小文字を付し区別した。
5. 遺物
 - ・遺物の登録は種別ごとに行い、掲載した遺物には以下の略号を使用している。
F : 軒丸瓦・丸瓦 G : 軒平瓦・平瓦 H : その他の瓦 I : 陶器 J : 磁器 K : 石製品
N : 金銀製品 S : 増輪 X : 土師質土器
 - ・遺物の法量で（ ）で示した数値は推定復元値、「-」は計測不能を示している。

目　　次

序 文

例言・凡例・目次

第1章 はじめ	5	まとめ	14
1 若林城跡と周辺の環境	1	(写真図版)	16
2 これまでの調査	3	第3章 第7次調査	
3 調査にいたる経緯と調査実績	5	1 調査の方法と経過	19
第2章 第6次調査	2	2 基本層位	19
1 調査の方法と経過	6	3 検出遺構	20
2 基本層位	6	4 出土遺物	27
3 検出遺構	7	5 まとめ	42
4 出土遺物	13	(写真図版)	45

第1章 はじめに

1 若林城跡と周辺の環境

(1) 地理的環境

若林城跡はJR仙台駅の南東約3kmの若林区古城に所在し、その名は仙台市の区名にもなっている。西側には名取川の支流である広瀬川により形成された段丘地形が発達しており、この地域を境に東側は太平洋へと続く沖積平野が広がっている。また遺跡南の下流側には自然堤防や後背湿地が形成されている。遺跡の周辺には中小の埋没河川とそれらに挟まれた微高地が多数みられ、若林城はそのような微高地を中心に造営されたと考えられる。遺跡の標高は13m前後である。

(2) 歴史的環境

遺跡周辺は古くから市街地化が進んだことから、現在確認できる遺跡数は少なく、特に繩文時代や弥生時代の遺構はほとんど発見されていない。しかし古墳時代になるとこの地域に東北で有数の規模を誇る前期前方後円墳である遠見塚古墳をはじめ、中期から後期にかけていくつかの円墳が造られている。さらに古代には北方に陸奥国分寺や国分尼寺が造営されるなど、この地が古より仙台地方の中心地的役割を果たしてきたことがうかがえる。若林城

%	遺跡名	種類	年代	%	遺跡名	種類	年代
1	若林城跡	円墳・築壘跡・城郭・砦跡	古墳～近世	11	大崎八幡神社	神社	近世
2	舞桜山遺跡	居館・集落跡	弥生・古墳・中世・近世	12	新白蛇跡	城壁	中世・近世
3	法華坂古墳	円墳	古墳(藤木町)	13	福ヶ森伊達家墓所	墓所	近世
4	南小糸溝跡	城壁・築壘跡	繩文～近世	14	猪ヶ森山跡	城壁	中世
5	遠見塚古墳	前方後円墳	古墳(原町)	15	茂ヶ森城跡	城跡	古墳(原町)
6	中亘家山遺跡	居館跡・岡玉跡	弥生・古墳	16	三神爭古跡	集落跡	绳文・古代
7	仙台東刈条型古墳	美形古墳	古代	17	源氏道跡	木道跡	平安～近世
8	南山跡	城壁	中世	18	福沢山城跡	集落跡・水田跡	绳文～中世
9	陸奥國分寺跡	寺院	古代・中世	19	郡山曲輪	官署跡・集落跡・水田跡	绳文～中世
10	陸奥國分尼寺跡	寺院	古代	20	北丘城跡	城址	绳文～近世

第1図 周辺の遺跡

跡の東側に広がる南小泉遺跡では古墳時代から平安時代の集落跡が発見されているのに加え、中世になると城館跡や屋敷跡が複数発見されており、これらは国人領主層やその家臣の居所とみられている。

戦国期にはこの地を国分氏が治め、延宝年間（1673～1681）の『仙台領古城書立之覚』には、この付近に二つの「古城」が存在したという記載がある。元禄・享保年間（1688～1736）の『東奥老士夜話』によれば、若林城はこのいずれかの城跡に築かれたとしている。若林城とその城下の軸線は西に隣接した仙台城下とは大きく異なり、これは若林城造営以前に既に存在していたとされる国分氏時代の城下の地割を踏襲したことによるものと考えられている。それを証明するように、近年の若林城周辺の発掘調査において、同様の軸線をもつ中世から戦国期の遺構が発見されている。若林城とその城下の建設は仙台城下の拡大に大きく貢献したとされている。

若林城の廃城後、北に位置する養種園遺跡の地に伊達家の別荘である「御仮屋」や「小泉屋敷」が造られることで、この地は仙台藩や伊達家と近世・近代を通して関わっていく。しかし一方では明治12年（1879）、若林城跡に西南戦争国事犯の収容を目的として宮城集治監が建設され、宮城刑務所として現在に至ることとなる。

（3）若林城について

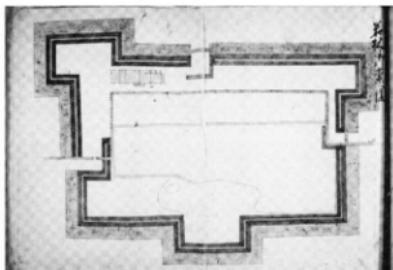
寛永4年（1627）2月、幕府より伊達政宗に宛て、新たな屋敷の造営を許可する老中奉書が出された。これが若林城の初見となる普請許可である。元和の一国一城令のもと、幕府に対しては「屋敷」と称したが、藩内の文書には「若林城」や「御城」などと記され、政宗自身もこの屋敷を造営当初から「城」と称していたことがわかる。当時、国元に城にも匹敵する新たな屋敷を築くことに対する幕府の対応は寛大で、ここに一大名の地位を超えた政宗の立場をうかがうことができる。

同年5月の『若林普請覚』には、「御山里石かき」、「南西どて」、「南之丸」などの城内の施設や政宗自身が指示した普請内容が見られる。また別の文書では、大雨で城北側の土居が破損した際、葺の敷き方や調達方法、領内からの人足の集め方など、政宗自ら藩主としては異例ともいえる詳細な指示を出しているのがわかる。翌寛永5年（1628）11月、政宗は完成した若林城に入り、これ以後は若林城を国元にいる際の日常の居所とし、仙台城には公的な儀式の際に赴く程度であった。

若林城は東西に長い長方形を基本に、四方に防御的性格をもつ張り出しを備えた典型的な平地型の近世城郭である。南北軸線は東に約10度傾いており、堀跡を含む規模は東西420m、南北350m、土塁内側での規模は東西250m、南北200mと、一つの郭としては広大な面積を有し、これは仙台城本丸や若林城廃絶後に造営される仙台城二の丸の規模に匹敵する。現在は記録にみえる石垣などは確認できず、壁線は全て土塁である。土塁の高さは5m、基底幅は25mあり、外側の堀跡は南側部分で25m程度の幅と推定される。土塁は現在あるコンクリート堀の設置に際し上部が削平されている以外はほぼかつての姿を留めていると思われるのに対し、堀は北及び西側が埋められ、南側も深さ1mほどが残るにすぎない。政宗の重臣である伊達成央が著した『政宗記』には、土塁の高さ二丈（約6m）



第2図 若林城跡（平成17年撮影）



第3図 「若林御葉園」「御修覆帳」（宝曆～安永）

東北大大学工学研究科都市・建築学専攻空間文化史学分野所蔵

余り、堀幅三〇間（約54m）とあるが、現在確認できる堀幅とは大きく異なっている。

横矢を掛ける張り出しは北西隅、西辺南端、南辺中央、東辺北端の4か所に設置されている。出入口は南を除く3か所にあり、西口を入ると左に鉤型に折れる内枠形土塁がある。現在は高さ2mと低いものだが、後世改変されたと考えられる。かつては北・東側にも内枠形土塁が存在したことが絵図により確認できるが、西側の土塁がひときわ大きく描かれており、側近による『木村宇右衛門覚書』は、大手は西であったとしている。この事は仙台城や奥州街道との位置関係からも明らかで、西の二つの張り出しは城の大手を意識した配置といえる。

若林城に関しては城内の施設を表した絵図の類は残っておらず、幾つかの文献によりその様子を知るのみである。『若林普請覚』にある「山里」は庭園を伴う一角とみられ、そこに「石垣」が築かれていたことや、「的場」があつたことがうかがえる。また「南之丸」に水を引き入れたとあり、池などの存在も推定される。さらに「東奥老士夜話」は、東南角に「矢倉」があり、北に「築山」があったとしているが、現況で櫓台などの遺構は確認できず、この記述が現在残る城内の様子であったかは定かでない。

寛永13年（1636）4月、政宗は参勤で江戸に向かう際、城の南西に杉を植え、堀一重を残し城は廃するよう命じ、5月に江戸でのこの世を去った。建物の一部は寛永15年（1638）に二代藩主忠宗により造営が開始された仙台城二の丸の殿舎として順次移築されたほか、仙台城下の寺院や家臣屋敷に移築されたものもあったとされる。廃城後にこの地は「在郷分」として小泉村に含まれることになる。また寛永13年に若林の検地帳を収めた御帳蔵が火災にあったことや、貞享4年（1687）に焰硝蔵が爆発した記録が残っているが、これらは城外での出来事であったものとみられる。これに対し、延宝8年（1680）の『肯山公治家記録』にみえる「若林薬園」は、藩の管理下にあった施設をまとめた「御修復帳」にも描かれていることから、廃城後にこの地が藩宮の薬草園となっていたことがうかがえる。

2. これまでの調査

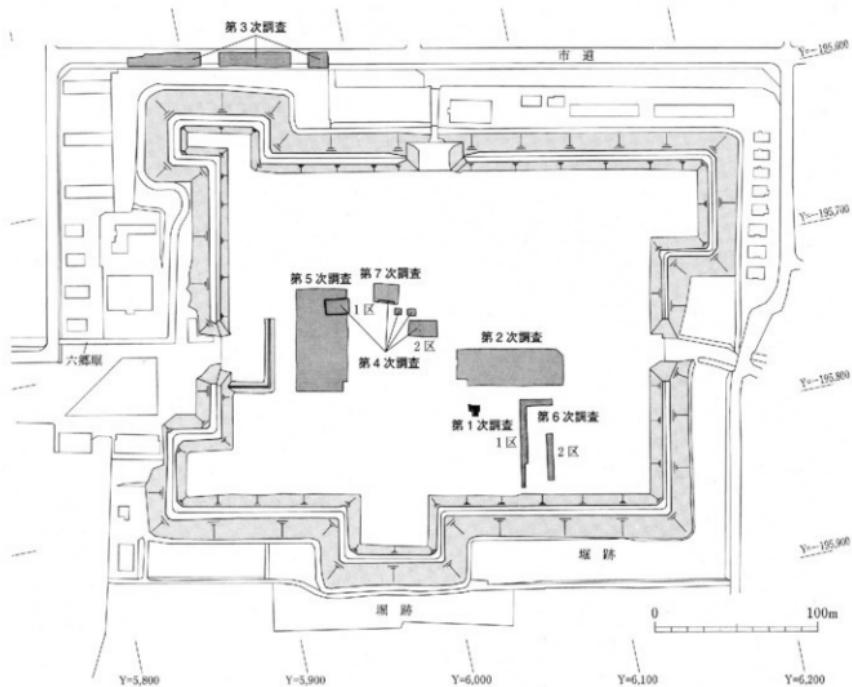
若林城跡の発掘調査はこれまで5回実施している。昭和59年の施設建設に伴う第1次調査では中世から近世とみられる掘立柱建物跡が発見された。翌年の第2次調査では円筒埴輪を作った5～6世紀の円墳1基や9～10世紀の竪穴住居跡4軒などが発見されたが、若林城に関連するとみられる遺構は瓦が入った土坑1基のみであった。さらに平成11年に都市計画道路建設に伴い城外北側で実施した第3次調査では、堀の屈曲部を確認する成果はあったが、城内においては明治以来、中心的倉庫である六角塔をはじめとする矯正施設の建設により、若林城の遺構のほとんどは既に失われているものと考えられていた。

そのような中、昭和40年代に建設された施設の老朽化による宮城刑務所の全体改築計画が出されたのに伴い、平成16年4月に城内全域を対象とした試掘調査が実施され、引き続き同年9月から遺構の検出された地点を中心に第4次調査が実施された。調査の結果、2つの調査区と3つの試掘区全てにおいて若林城造営の際の整地層が確認され、整地層上には六角塔の基礎より古い複数の礎石跡や雨落ち溝跡、石敷造構などが確認されたことから、平成17年度に第1期建物工事部分約2,000m²を対象とした本調査を行うこととし、11月に調査区を埋め戻した。

平成17年5月に開始した第5次調査では、「御薬園」時代とみられる近世の畑跡の調査を終了させた後、整地層面での若林城跡の遺構調査に着手した。ここでは、第4次調査検出のものを含む4棟の礎石建物跡や、広範囲にわたる石敷造構などが新たに発見された。1号礎石建物跡は西側に玄関を伴い、内部に大型の礎石跡を持った特殊な構造の建物である。南側に位置する2号建物は鉤形



第4図 第5次調査で発見した建物群（東から）



第5図 調査区位置図

に曲がり、その西側に隣接する3号建物は南北に長い建物であるが、両建物とも周間に縁（廊下）が巡り、これによりつながっている。また全ての建物周囲には雨落ち溝が巡っている。しかし柱を支えた基礎は1石も残っておらず、廃城に際し建物部材と共に城外に持ち出されたものと考えられた。北西側に配置される石敷遺構は城の西側の大手口近くに位置したものとみられる。さらに1号建物は仙台城二の丸の初期の建物配置を描いた「御二之丸御指図」との対比から、若林城から二の丸に移築された「大台所」であることが判明すると共に（註1）、3号建物についても移築された建物の可能性が考えられている。

第5次調査ではこれまで不明であった若林城内部の施設の様子が初めて明らかになったのに加え、発見した建物群はその規模や構造、城内での位置などから城の表御殿と判断されるにいたった。さらに城の存続期間が10年足らずと知いことから、発見された遺構群は江戸初期の城の御殿建築様式をうかがうことのできる貴重な資料となった。

これらの調査成果を受け、仙台市教育委員会は遺構の保存を前提とした協議を宮城刑務所、仙台矯正管区との間で行ない、調査終了後の平成18年2月に調査区を再度埋め戻すこととなった。

(註1) 東北大学名誉教授佐藤巧先生の御教示による。

3 調査にいたる経緯と調査実績

第5次調査の成果を踏まえ、翌18年3月に文化庁、法務省、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会の四者間で、今後の遺跡内での施設建設と発掘調査のあり方や方法、そして若林城跡の史跡指定に向けた今後の取り組みなどに関する方針が確認された。

これに先立ち、刑務所施設の一連の改築計画に伴い、仮設の職業訓練棟の建設設計図が宮城刑務所側より提示された。事前の調整により建物基礎は遺構面に影響を及ぼさない深度と構造ではあったが、その使用が長期にわたるものであったことから、宮城県文化財保護課を交えた協議により、建物範囲内の遺構確認を目的とした事前調査（第6次調査）を実施することとなった。調査では一部を除き、遺構の掘り込みは行っていない。

さらに施設の改築とは別に、若林城の史跡指定を見据え、遺構の分布状況の確認や、工事に伴う調査などで検出した遺構の性格を解明することを目的として、今後は国庫補助事業としての調査も並行して行っていくことが確認された。これを受け、第5次調査で発見した建物群の東側での展開を確認すると共に、第4次調査で発見した複数の礎石跡や石敷遺構の性格の解明を目的として、6月に第7次調査を開始した。

両調査は宮城刑務所の協力のもと、平成17年度と18年度の国庫補助事業として実施した。また調査は仙台市教育委員会が主体となり下記の体制で臨んだが、第6次調査では宮城県文化財保護課に調査員の派遣を依頼した。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

課長 阿部 功

調査係長 篠原 信彦

主査 渡部 弘美（第6次・第7次調査）

主任 佐藤 淳（第6次・第7次調査）

文化財教諭 佐々木 匠（第7次調査）

宮城県教育庁文化財保護課

技術補佐 後藤 秀一

主任主査 佐藤 憲幸

調査協力 宮城刑務所

仙台市博物館 佐藤 洋（陶磁器鑑定）

調査参加者 赤間淳子、赤間 哲、泉美恵子、上野美子、小野二千男、柿沼幸子、狩野吉則、小林いと子、小松千代子、佐々木瑞枝、佐藤とき子、島津レチ子、菅井清子、杉 一、鈴木みよ子、高橋勝恵、高橋たづ子、竹森光子、種田ふくよ、千葉恭子、千葉恭彦、早坂みつえ、原田由美子、松野順子、三浦正敏、水戸 智、宮城富子

整理参加者 相沢せい子、安部文子、臼井美津子、及川のり子、大金幸子、木幡和美、小林由美、佐藤さち子、半石良子、篠原宣子、杉船比佐子、茂垣馳子、森谷愛子、山田哲子

調査実績

調査名	調査地区	調査面積	調査期間
第6次調査	グラウンド西部（第2次調査南側）	450m ²	平成18年3月13日～4月2日
第7次調査	処遇管理棟東側（第5次調査東側）	175m ²	平成18年6月1日～7月7日

第1表 調査実績

第2章 第6次調査

1 調査の方法と経過

調査地は城内の南東で第2次調査区の南側に位置し、若林城期の遺構のみならず、古墳や竪穴住居跡などの検出が予想された地区である。調査区は予定建物の北辺から西辺にかけてのL字と東辺に沿い、幅約5mで2か所設定し、西側を1区、東側を2区とした。調査は重機によりII層までを掘削したところ、後世の削平とカクランによる遺構面の破壊が著しかったが、1区では畑耕作土であるIII層を広範囲に確認した。しかしIII層上面で遺構の検出は無く、続いてIII層を人力により除去したところ、第5次調査区周辺のような整地層は確認できず、南小泉遺跡を含めた周辺の調査では古墳時代から近世の遺構検出面ともなっているV・VI層面での検出作業となった。

検出した遺構は小溝状遺構群をはじめ、竪穴住居跡や土坑、溝跡、ピットであったことから、遺構の掘り込みは行わず、検出プランの平面・断面図と写真記録にとどめた。ただし1区の大規模な落ち込み跡や2区の石組水路跡については、その構造と時期解明の必要からこれを一部掘り込んだ。また両遺構の範囲や行方を確認する目的で、1区南端から南側に幅2.5m、長さ25m程度を拡張している。調査の終了後に掘削土による埋め戻しを行なった。

平面図作成の基準は各調査区の中軸線に沿い、5m間隔の杭を設置した任意の座標系を基に作図した。座標杭名は各調査区の北端に設置したものを原点とし、南及び東に行くにしたがいその距離を数値で示している。またこれらの調査区杭には後に世界測地系直角平面座標系による座標数値を与えており、座標数値は以下の通りである。

1区 (S 0・E 0) : X = -195,772.266 Y = 6,063.100 (S30・E 0) : X = -195,801.767 Y = 6,057.712

2 基本層位

基本層はI層からX層までを確認した。

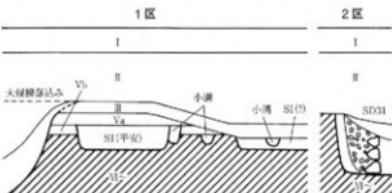
I層は現代の盛土で、調査地区では現グラウンドの砂である。

II層は明治11年に宮城集治監が設置されてから現代にいたるまでの盛土層で、層中には礫や砂のほか、刑務所施設にかかる瓦片や煉瓦、焼土など、様々なものが混入している。これらは度重なる施設の建設により廃棄されたものとみられるが、第4次調査のように建物の基礎地盤として硬く綺麗なブロック層が4層確認された場所もあった。またII層は1区の大規模落ち込みの上半部にも埋められている。

III層は1区のみに確認できる層下面が乱れた均質な層で、第5次調査同様に近世の畑耕作土と考えられる。出土遺物には近世より新しい遺物は無い。この層はII層同様に大規模落ち込み内に多少変質しながらも傾斜面から下面近くまで堆積している。またIV層はその性格から本来は城内の広域に分布する層であると考えられることから、2区周辺や第2次調査地においては、後世の削平により失われたものと考えられる。

V層も1区のみの確認で、黒褐色・暗褐色のシルト質の2層に分層できる。層中には炭化物粒や焼土粒が混入し、下面に亂れがあることから、若林城期以前の表土、もしくは畑耕作土の可能性がある。両層の下面より小溝状遺構が検出されている。

VI層より下層は褐色を基本とした砂質シルト土で、かつて周辺を流れた小河川を起源とした自然堆積層とみられる。第1・2次調査での遺構はこのVI層面近くで検出されている。



第6図 基本層位模式図

層位	土色	土性	特徴	層位	土色	土性	特徴
I	—	—	(表上)	Va(1B層)	10YR3/4 暗褐色	シルト	径2cm以下の筋層ブロックを少量含む
IIa	—	—	(近現代の整地層)	VI	10YR4/6 海色	砂質シルト	
IIb	—	—	(古式の整地層)	VII	10YR4/4 海色	砂質シルト	下面に乱れあり
III(1区検出層) 10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物粒・透水性を強調含む、下部に亂れあり	VIII	10YR3/4 暗褐色	砂質土	透水性炭化物を含み、表面を走る下部乱れあり	
III(1区検出層) 10YR4/4 地色	砂質シルト	均質な土壤	IX	10YR4/4 海色	砂質シルト		
IV(1区検出層) 10YR3/2 暗褐色	シルト	炭化物粒・透水性を強調含む、下部に乱れあり	X	10YR4/4 海色	砂質シルト		

第2表 基本層位

3 検出遺構

(1) 1区検出の遺構

竪穴住居跡

S I 1はV b層面で検出し、南北軸の方向は東傾11°である。東西の長さは約4.4m、南北は不明で、形状は隅丸方形とみられる。堆積土は暗褐色シルトで、VI層が小ブロック状に混入している。小溝群3-1より新しい。

S I 2もまたV b層面で検出し、南北軸の方向は東傾5°である。南北の長さは約3.3m、東西は不明で、形状はS I 1同様に隅丸方形とみられる。堆積土は褐色シルトで、やはりVI層が小ブロック状に混入している。小溝群4やSX 2・3より新しい。

S I 3はVI層面で検出し、南北軸の方向は西傾28°で、他の2軸に比べ大きく方向が異なっている。隅部の丸みは小さく、規模は4.5m以上の方形と推定され、また堆積土は黒褐色シルトであるなど、S I 1・2とは複数の点で異なっている。北西側の床面上に長軸40cm、短軸30cmの柱穴を1基検出した。小溝群6・7より古い。

3軒の竪穴住居跡のうち、S I 1・2は形状・規模・堆積土などの点で共通しており、周辺での出土遺物からみて平安時代の住居跡と考えられる。これに対しS I 3はV b層下面での検出であり、小溝状遺構群との重複関係からみても他の2軒より古い時期のものと考えられる。

土坑

8基を検出した。検出面はSK 208~213がⅢ層除去後のVa層面で、SK 214・215がVI層面である。

SK 208は長さ160cm、幅90cmの細長いものである。小溝群3-2と軸を同じくして重複しているが、堆積土が異なることから別遺構と考えられる。SK 209は長軸110cm、短軸85cmの隅丸長方形で、小溝群3-2より新しい。SK 210は長軸100cm、短軸82cmの楕円形で、小溝群3-2より新しい。その他SK 211~215は褐色・暗褐色のシルトや砂質シルトを主体とする小型の土坑である。形状は円形、隅丸形、不整形など様々であるが、後世の擾乱などにより形状が不明瞭である。

土坑は形状の整ったSK 209をはじめ、円形主体のもので、その多くは単独の土坑と考えられるが、耕作土であるⅢ層下で検出したものもあり、これらの一帯は耕作痕跡の可能性もある。

溝跡

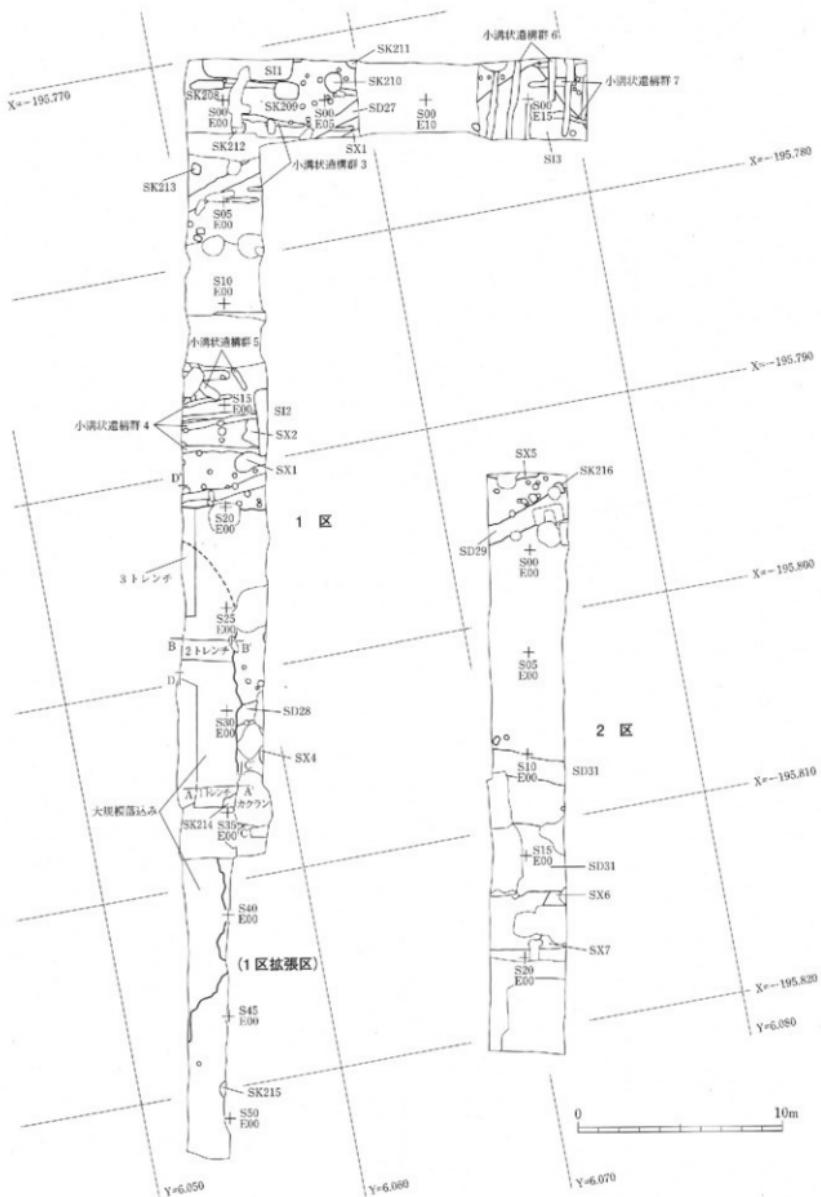
SD 27はV b層面で検出した。東西方向の溝跡で方向は東傾70°である。確認長は10m、幅は約80cmである。壁面上部は緩やかで、堆積土は黒褐色シルトである。小溝群3-3より新しい。SD 28は東西方向の溝跡で、方向は東傾83°、幅は90cm程度で、2区検出のSD 29と同一溝の可能性がある。

両溝跡は幅が狭く、素掘りであり、耕作に関係した遺構とみられる。時期は廃城後に營まれた痕跡が城方向に一致するのに対し、異なる方向であることから若林城以前の遺構と考えられる。

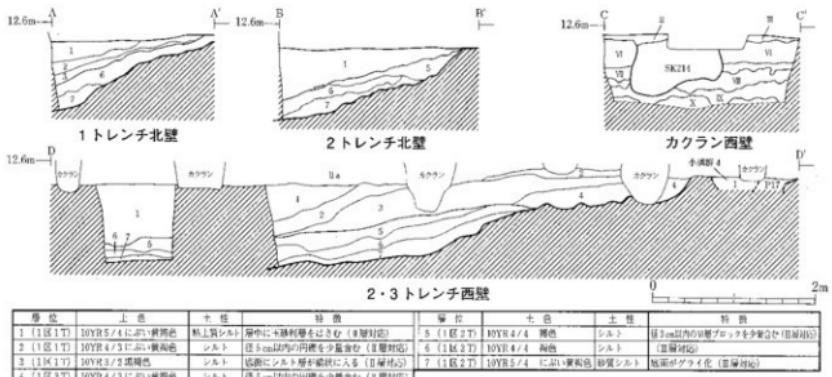
畑跡（小溝状遺構群）

3群から7群の5つまとまりを検出した。

3群はVb層面で東西方向に5条を検出した。方向は西傾80~73°である。溝幅は20~30cmで、溝間は幅の広い所が1.6m、狭い所が55cmと差があり一定せず、これは残存状況によるものとみられる。堆積土は暗褐色シルトであ



第7図 遺構配置図



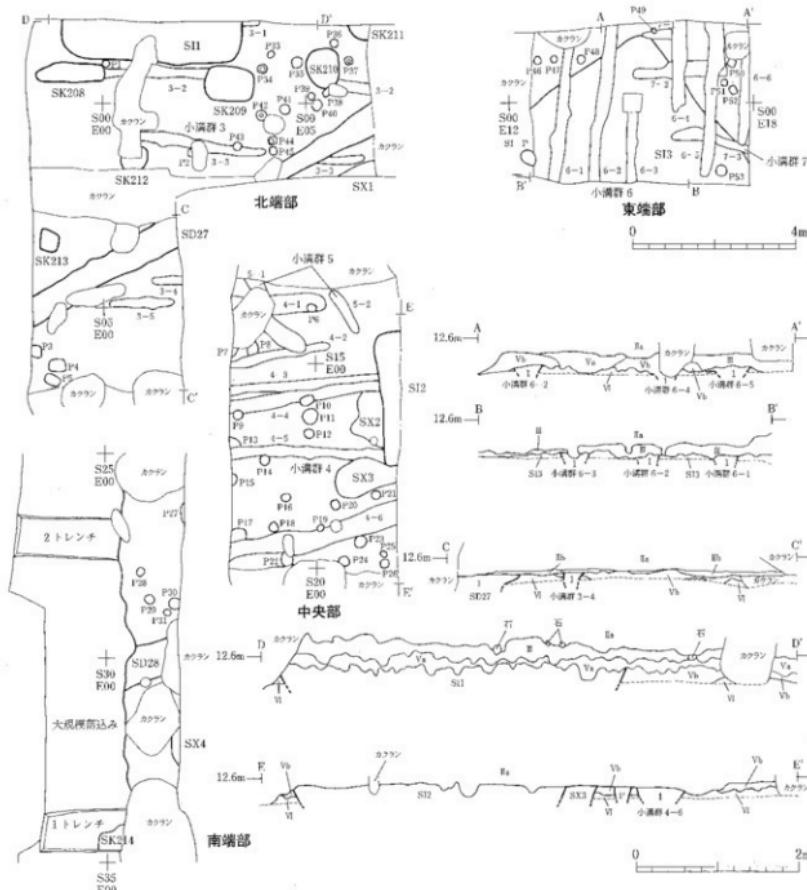
第8図 レンチ断面図

る。他造構との重複はS I 1をはじめ、SK208~210やS D 27より古い。4群はVb層面で東西方向に6条を検出した。方向は東傾87°~101°である。溝幅は20~60cmで、特に南端のものが幅広である。溝間は一部に重複するものがある一方、北側では1.2m程度である。堆積土は暗褐色シルトである。他造構との重複はS I 2より古く、SX 2・3より新しい。南端の幅広の小溝は、堆積土が同じなことから一連の耕作痕跡としたが、幅や方向が多少異なり、単独の溝跡の可能性もある。5群はVb層面で南北方向に2条を検出した。方向は西傾20°である。溝幅は20~40cmで、溝間は1.5m程度である。堆積土は暗褐色シルトで、4群と重複し、これより新しい。6群はVb層下のVI層面で検出した。南北方向の6条で方向は東傾17°である。溝幅は20~40cmであるが、他の群に比べ差は少なく、また溝間も80~110cmでほぼ一定し平行している。堆積土は黒褐色シルトであるが、S I 3と7群を切ることから、堆積土は住居跡に類似するものとなったと考えられる。7群は6群同様にVI層面で3条を検出した。方向は6群に直交した東西方向で、西傾80~82°である。溝幅は20~40cm、溝間は90~160cmと差はあるが、これもまた残存状況によるとみられる。堆積土は黒褐色シルトである。

今回検出した小溝状造構群はVb層面検出の3~5群と6層面検出の6・7群の2つに分けられる。前者は主に東西方向のもので、平安時代とみられる竪穴住居跡に切られ、これより古い時期の烟跡と考えられる。後者は直交する2つの時期があるが、Vb層下面で検出され、S I 3より新しい事を考えると古墳時代から平安時代の可能性がある。しかしVb層もまた耕作土と考えることができ、短期間に幾度も手を加えられる耕作土の性質上、3~5群とさほど違わない時期の可能性もある。

柱穴・小穴

V a・V b・VI層面で53個を検出した。後世の改変により検出面に違いが出たものとみられる。検出箇所はS I 1・3と小溝群4周辺が多い。小溝群4との重複関係ではこれより新しいものと古いものが認められ、ピット間に時期差が認められる。堆積土はほとんどが黒褐色シルトににぶい黄褐色ブロックが少量含まれるものである。形状は円形や隅丸方形で、大きさは20~30cmが主で、一部に40cm程度のものもある。S I 1の南東側に位置するP 34・37・42・44には褐色の掘り方埋土内に黒褐色の柱痕跡らしきものが認められる。中でも南北に並ぶP 34と44間の距離は178cmで、またこれと直交する34と37間は215cmであり、柱間は異なるが掘立柱建物跡の一端となる可能性も否定できない。時期としてはピットを結んだ方向が城とはわずかに異なり、城以前のものと考えられる。



第9図 1区検出の遺構

性格不明遺構

S X 2 ~ 4 を南半部で検出した。いずれも不整形で、10~20cm程度の浅いものである。S I 2 や小溝群4より占いが、堆積土が小溝状遺構群と類似することや、底面に凹凸が顕著に認められることを考慮すると、小溝部分以外の耕作土底面に形成された痕跡である可能性が高い。

大規模落込み

調査区南半部の西側において、南北長が24.5mにもおよび西側へ下がる落ち込みを検出した。プランは大きな弧を描きながら、北端と南端では西側に回り込んで調査区から外れており、調査区の西側に広がる何かしらの地形の一部と考えられる。プランの東辺は弧状とはならず、城の南北方向と一致している。全体の掘り込みは行なわなかつたが、一部での掘り込み（1~3トレンチ）の結果、傾斜面は20~25°で緩く下り、深さ1mまで掘り込んだところ、3トレンチにおいて平坦面を確認した。堆積土は上半に瓦礫や煉瓦を含んだⅡ層が入り、下半にはブロック土をあまり含まない褐色シルトの均質な層が確認された。この層はⅢ層と類似しており、おそらくはⅢ層が自然流入することで土質が変化したものと推測され、残念ながらⅣ層との関係は不明であるが、落ち込み地形は魔域後に城内で細が営まれる以前には存在していた可能性が高いと判断される。プランの北東側は上を覆うⅡ層により範囲が不明瞭であったが、調査区西壁断面でプランの落ちを確認している。

平成16年に当地区の西側で実施した試掘調査において、河川起源の洪水上による砂質シルト中心の層とは異なり、窪地や沼地、濱など河川内などにみられる泥炭質土壤が確認されている。今回検出したプランは城内南側を中心に存在した自然地形による落ちの可能性も否定できないが、おそらくは何かしらの遺構の縁辺とみられ、近世を通じ痕跡を残していたものが、集治監設置に伴う造成の際に完全に埋め立てられたものと考えられる。

(2) 2区検出の遺構

溝 跡

2区は上層の残存が極めて悪く、遺構の検出は全てVI層面である。S D 29は東西方向の溝跡で、方向は東傾76°である。幅は約75~140cmでこれは残存状況の違いによるものである。壁面はやや急で、堆積土は褐色シルトである。S K 216より古い。S D 30もまた東西方向の溝跡で、方向は西傾72°である。幅は110cm、堆積土は暗褐色シルトである。他遺構との重複は無い。1区検出の溝跡同様に両溝跡もまた耕作に関係した溝とみられ、方向から若林城以前のものと考えられる。

S D 31は東西方向の右組みの溝跡である。方向は西傾80°である。当初は堆積土上部に瓦礫が入ることから近現代の施設ともみられたが、一部を掘り下げるに側石が残存する水路跡である事が判明した。調査では検出部分の西側半分を掘り込んでいる。溝跡の構造は幅約3.2~3.5mの掘り方の壁際に径10cm内の小円礫を裏込め石として多量充填している。溝南側では掘り方と裏込め石間に褐色砂質シルト土が積まるのに対し、北側は掘り方に直に石を積んでいるのがわかる。側石には最大径が60cm程の玄武岩質の石材を自然面や剥離した平坦な面を内側に向け組み上げている。石組みは2段程度の残存であった。石組みによる溝の内幅は140~150cmである。溝底面は平坦で、中央に幅70~60cm、深さ10cm程の深い溝が切られているが、第5次調査で検出した石組み溝底面のような敷石はみられない。堆積土は最上層が近代の埋廻し土で、それより下層はⅢ層に類似した褐色の砂質シルトを主体とした層である。層中には側石とみられる大型の石材をはじめ裏込め石が多数入っており、状況からみて溝は側石を外し壊された後に埋められたと考えられる。

溝跡は西側の1区では検出されていない。このため2区西側で南に折れ、土塁際を西進するとの想定で1区を南側に拡張して確認作業を行なったが検出できなかった。このことから、現時点では推定の城を出しないが、溝跡は2区西側で北に折れ、1区S 10付近の東西方向の溝状擾乱部分と重複しながら、落ち込みの北側を西進する可能性が考えられる。今回検出した水路跡は構造や側石の石材が第5次調査での水路跡に類似しており、両者は関連する遺構

と考えられる。

土 坑

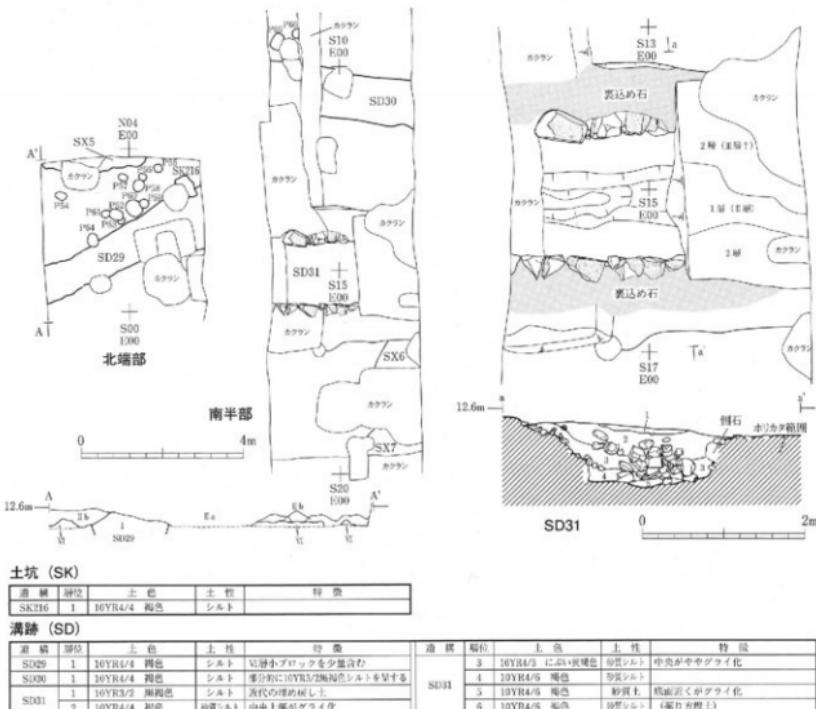
S K26の1基を確認した。S D29より新しいが、形状も不整形で性格は不明である。

小 穴

VI層面で14個を確認した。1区検出のものとは異なり、堆積土は褐色か暗褐色のシルトで、擾乱の少ない北端に多く検出した。柱痕跡を有するものは無く、建物を構成するような位置関係にもない。

性格不明遺構

S X 5～7の3基を検出した。S X 5の堆積土は黒褐色シルト、6・7は褐色砂質シルトであるが、全体形状が不明な上、未掘であることから詳細は不明である。耕作痕跡の可能性もある。



第10図 2区検出の遺構

4 出土遺物

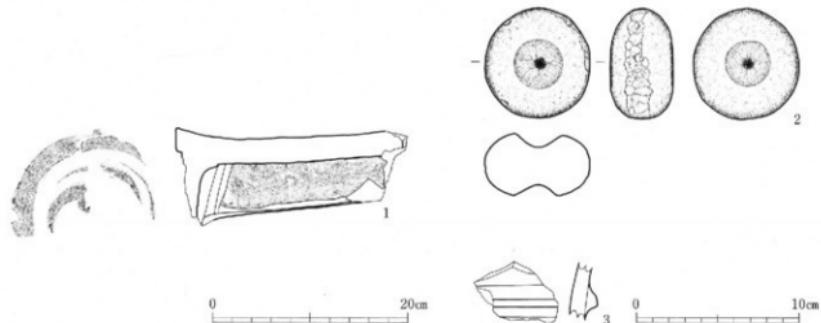
調査では掘り込んだ遺構は S D31のみで、他は確認のみに止めたことから、出土遺物数や種類は極めて乏しい状況であった。

最も数量が多いのは瓦で、種類には、軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦がある。F1はピットから出土した軒丸瓦で、左巻きの三巴文である。第5・7次調査で出土したものは全て周縁に珠文が付くもので、巴文のみの軒丸文様の出土は初めてである。法量や尻部の形状は不明であるが、瓦当内区からみて平均的な大きさのものとみられる。尻部近くに釘穴がある。丸瓦は長さを知り得るものは無く、幅が15.8cmで高さが7.2cmのものと、14.0cmで6.6cmの小型の2点がある。玉縁部が残存するものは7点あり、長さは2.7~3.9cmとばらつきがある。凸面の調整は縦横二方向のナデで、凹面はコビキ痕や布目がみられるが、綱圧痕や棒状具による刺突痕は確認できない。平瓦は凸面・凹面共にナデ調整が施される。凹面にヘラによる幅広の刻線があるものについては熨斗瓦の可能性もある。また小口面に小さな「〇」の刻印1点を確認した。熨斗瓦は唯一幅のわかるもので12.2cmである。基本的には平瓦を二分したもので、調整は平瓦と同じである。分割線の深さは2~10mmと差があり、線の断面形状にも違いがみられる。

土師器は全て小破片で図化したものは無い。环はロクロ使用で内面黒色処理を施したものがほとんどで、甕はロクロと非ロクロ成形の両者がある。これらは全て奈良~平安時代のものとみられ、それ以前の時代の特長をもつものは確認できない。須恵器の环は底部が回転糸切りのものと回転ヘラケズリ調整のものがある。

陶磁器はわずか5点の出土である。器種不明の堤焼や肥前の染付皿・碗があり、これらは若林城の時期よりは新しいものである。

その他には、繩文時代のものとみられる二次加工のある不定形石器と凹石状の石製品のほか、隣接する第2次調査区で発見された古墳時代中期から後期の円墳に関係するとみられる剣形石製模造品や円筒埴輪片が各1点出土している。



図版番号	登録番号	種類	器種	遺物・削除	文様	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	写真番号	
1	F-1	軒丸瓦	ピット	三巴文	—	—	13.6	2.9	0.7	1.94	左巻き、釘穴あり、凸面：ナデ、凹面：コビキ痕・布目	3-1	
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
—	J-1	須恵器	(未明)	1区1層	—	7.1	—	—	—	—	堤焼	19C-L1B	3-2
—	J-2	須恵器	環	1区1層	—	—	—	—	—	—	笠置	笠置	3-3
—	J-2	須恵器	環	1区1層	—	—	—	—	—	—	笠置	笠置	3-4
図版番号	登録番号	種類	器種	遺物・削除	文様	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	写真番号	
2	K-1	石製品	圓石	1区1層	6.8	6.4	3.8	0.25	—	—	表面に深いくびれ、側面に全面して熱打板あり	3-5	
3	S-1	埴輪	円筒埴輪	1区2層	—	—	1.0	—	—	0.02	六字あり、調整不明	3-6	

第11図 出土遺物

区	通路・基本層	瓦				合計	土師器	土師器土器	須恵器	陶器	磁器	鉄片	石製品	金属製品	埴輪	
		軒丸瓦	丸瓦	平瓦	筒瓦											
1区	I層	5 1920	2 1060			10 3000										
	II層	8 745		29 1900	4 665	41 3250	27		8	2	1		1	2		
	III層				4	4							1	1	2	
	V層				125	125										
	VI層						27									
	VI層壁面		1			1	44	3	6							
	1T2層	270				270										
	2T2層	1 20		1 5		2 25										1
	3Tカクラン		3			3										
	3T3+層	80 25 3435		65 19 7580	109 3230 3230	14245							1			
1区(重複)	VI層壁面	1				1										
	VI層壁面	50				50										
	S001	38 4150		8 486	1 90	41 4726	2						1			
2区	合計	5 1920	77 9870	0 9	107 10966	24 3952	2:3 25511	180	7	22	3	2	1	2	4	1

第3表 出土遺物集計表

※ 瓦の上段は点数、下段は重量(g)

5まとめ

今回の調査では礎石建物跡や石張遺構など、若林城の遺構を直接的に知り得るもののが発見は無かったが、その前後の時代の注目すべき遺構を発見した。

[竪穴住居跡について]

昭和60年に実施した第2次調査区は本調査区の北側に位置しており、調査では9世紀末から10世紀初めとみられる竪穴住居跡が4軒発見されている。住居跡の南北軸は全てやや東に偏し、中にはカマドを伴うものもあり、全体に隅部が角張る形状のものである。これらの住居跡群は今回検出のS I 1とは10m足らずの距離であるのに加え、方向性が同じである点、さらに検出段階でロクロ使用の上師器片が出土していることを考えた場合、未掘のため断定はできないが、S I 1とS I 2は同時期の一連の遺構群であるものと考えられる。

これに対しS I 3は他の2軒と方向性や堆積土が異なり、埋没過程での周辺土層に違いがあったと考えられる。また住居跡群と重複する小溝状遺構群のうち、3・4群はS I 1・2より古いのに対し、検出面からみてこれより古い6・7群がさらにS I 3を切る状況が確認されたことで、S I 3が平安期とみられる他2軒より古い住居である事がわかる。隣接する南小京跡では古墳時代前期から平安時代にかけての様々な時代の住居跡が発見されており、若林城跡第2次調査では住居跡群に加えその西側に5世紀後半から6世紀初めの円墳が1基検出されている事実からもても、S I 3は古墳時代まで遡る可能性もある。

[畠跡について]

西側に位置する第4・5・7次調査区では、III層下のIV層地層面やVI層面において小溝状遺構群が多数検出され、これがIII層に伴った耕作痕跡である事が判明した。そしてIII層は層中に近代の遺物を全く含まない事から、若林城廃城後にIV層や一部盛られた客土を剥ぎました近世段階の土壤であり、「若林御葵園」に関わる耕作土と判断されるにいたった。しかし今回の調査では一部を除き、III層の大部分は後世に削り取られており、この時期の小溝状遺構群は検出されていない。検出したものの多くは方向が城に一致するIII層畠跡のあり方と同じだが、検出層位は城以前の旧表土或いは畠土壤の可能性のあるV層の下であり、小溝群3と4は住居跡との関係から平安時代かそれ以前のもの、また小溝群6と7はさらに古く、古墳時代まで遡る可能性もある。後世に改変された地区での畠の広

がりや、溝形状や間隔から栽培物を推定することは難しく、今後の検討課題としては、小溝群の方向性や、遺構が検出できなかった理由が改変以外に旧地形や他遺構との関係による耕作域の制約などが挙げられる。

[石組水路跡について]

江戸時代初期、寛永年間の若林城の姿を描いた絵図は残っておらず、後に設置されたとする「御薬園」時代の絵図が複数あるに過ぎない。若林城が描かれた最も古い城下絵図である宝曆・明和年間の「仙台城下絵図」をはじめ、「御修覆帳」所収の「若林御薬園」(宝曆～安永) (第3図)、「若林古御城」(文化・文政)、そして「古御城絵図」(年代不明)などには水路や通路のほか、北西側に1棟の建物が描かれるのみである。そのような中、17世紀前半に開削されたとされる六郷堀とみられるものが西門から城内に入り、城内北側を鉤形に回りながら東門より城外に出て行く様子が描かれている点は全ての絵図に共通している。この水路は今まで未発見であるが、第5次調査の1号溝跡(石組水路跡)やSD31は取水をこのような城外からの堀に頼っていたことは明らかである。そして両者間に距離はあるが、同様な構造をもった水路跡が存在する事実は、これらが一連の施設として造られたか、あるいは時期は異なっても、同じ目的で造られた施設と考えるのが妥当と思われる。SD31は検出面での時期判定はできず、出土遺物も堆積土中の瓦がほとんどであるため構築年代を明らかにすることは難しいが、1号溝跡は他の遺構との関係から廃城後に造られたものとみられている。しかし城の造営当初においても、城内に存在していた可能性のある圍圏などへ城外より引水していたことは十分考えられ、今後はこれらの水路の時期や配置を開削時期や経路の変遷が明らかでない六郷堀との関連から検討する必要がある。

[大規模落込みについて]

1区南半部で発見した落込みは、その堆積土状況から推測して何かしらの造構の一部である可能性が高い。このような地形の落ちは第1次調査では検出されておらず、プランは第1次調査区を北縁とし、南は土壌際にまで及ぶかなり大規模なものと考えられる。前述の絵図の幾つかには、城内の南側の広い範囲に雲形のプランが描かれている。これは城内にかつて存在した「池」を描いている可能性があり、西端には中島らしきものもみられ、東西幅は100m程度と推定される。もしこれが池であった場合、このような大規模な施設が廃城後の城内に造られたことを否定することはできないが、その性格からみて若林城造営時に造られたものが、廃城後100年以上経った18世紀中頃においてどのような姿であれ、依然その形状を留めていた可能性が高い。

平成3年の城の北側に位置する差補園遺跡の調査で、伊達家の別荘である「国分小泉屋敷」のものと推定される池跡の一部が発見されている。池跡は東西幅が115mもあり、深さは最大で2.6m、池底には一部で石敷きが確認されている。この池は中島や周囲に閑路を配した池泉回遊式庭園とみられ、今回発見した施設を考える上で極めて参考となるものといえる。今回の調査では落込みの傾斜面や底面に石敷きなどの痕跡は確認できなかったが、プランの中央近くはより深いとみられる。また「御修覆帳」の絵図にはこの施設の東端から南辺の土壌間に沿って東門に至る何らかのラインが描かれているが、これは排水のための水路と見ることもでき、SD31との関係も問われるものである。

[本調査区の遺構のあり方]

第6次調査区では城造営時の整地層が全くみられず、北側に隣接する第2次調査においても整地層や礎石跡など城の遺構は検出されていない。この事が後の削平によるものか、また本来ここに存在しなかったのか判断するのは難しい。しかしこまでの調査では、一定規模を有する礎石跡や雨落ち溝跡は整地層下でも少なからず残存する場合が多く、地表面での石敷きや通路はともかく、建物跡の痕跡すら確認できない背景には、本地區を含む城の南東側が西側の第5次調査区での遺構のあり方とは全く様相を異にした地区であったとも考えられる。この点については城内に存在したであろう庭園や三方の出入口など他施設との位置関係に加え、他の近世城郭における施設配置からの検討が必要と思われる。



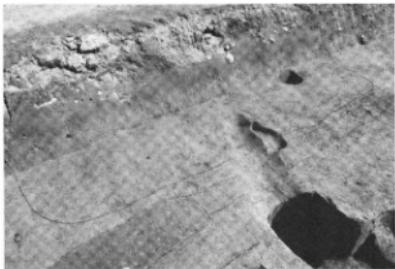
1. 調査区全景（南から）



2. 1区全景（南から）



3. 1区全景（北から）



4. SI1 検出状況（南西から）



5. SI1 検出状況（南東から）



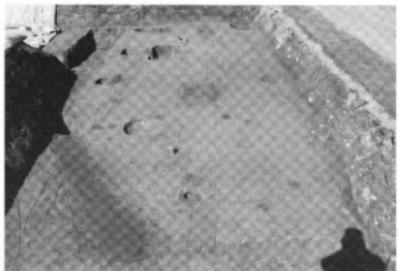
6. SI1 検出状況（西から）



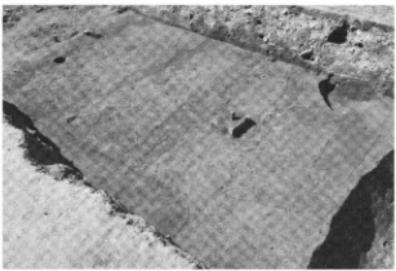
7. SI3、小溝群6・7検出状況（北西から）



8. SD27、小溝群3ほか検出状況（西から）



1. 1区北端部遺構検出状況（東から）



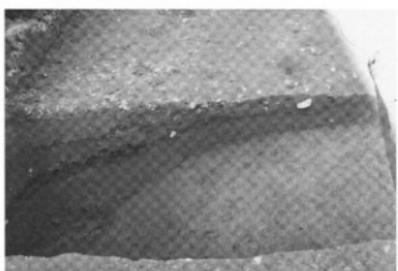
2. 1区中央部遺構検出状況（北東から）



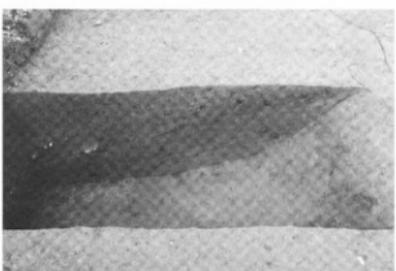
3. 1区南部遺構検出状況（北東から）



4. 1区南拡張区プラン検出状況（北から）



5. 1区1トレンチ断面状況（南から）



6. 1区2トレンチ断面状況（南から）



7. 1区3トレンチ断面状況（南東から）



8. 1区下層断面状況（東から）



1. 2区造構検出状況（北から）



2. 2区北端部造構検出状況



3. SD30検出状況（東から）



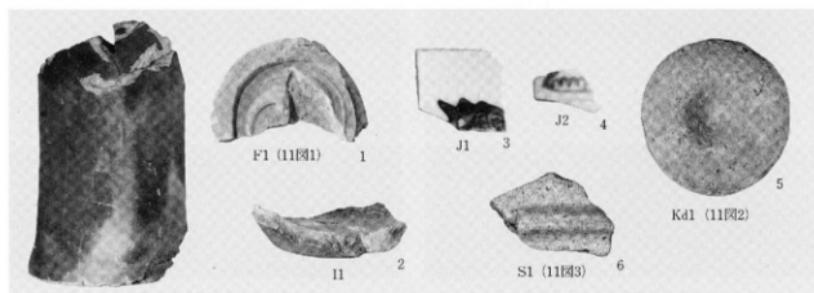
4. SD31裏込め石崩落状況（西から）



5. SD31完掘状況（西から）



6. SD31南側石組状況（北から）



S=1：約1/5、2：約1/3、3~6：約1/2

写真図版 3 2区・出土遺物

第3章 第7次調査

1 調査の方法と経過

調査地は第5次調査区の北東側に位置し、仙台城二の丸の「大台所」として移築されたとみられる1号礎石建物跡の東側である。またこの地区は第4次調査の北側にあたり、調査は建物の雨落ち溝跡や石敷造構、石列が確認された第3試掘区を含む北側を拡張する形で設定した。試掘区の規模は東西15m、南北12mで、方向は城跡の方向と一致させた。調査は重機によりⅢ層までを掘削した結果、昭和40年代に解体された六角塔の中心塔部分と北側に延びる倉舎の大規模な基礎が確認されたことから、これらを掘り上げてからの調査となった。

はじめにⅢ層面での遺構検出作業を行なったが、遺構は全く確認できず、統いてⅢ層中に含まれる瓦を取上げながらこの層を人力により除去したところ、整地層であるⅣ層が調査区全域に確認された。Ⅳ層上面での遺構検出作業の結果、Ⅲ層の粗土壌にかかる小溝状遺構群のほか、第4次調査時に検出された遺構の北側への展開を確認すると共に、新たに複数の溝跡や、調査区北半部で礎石跡から構成される新たな建物跡が確認された。調査は遺構確認を基本にしながらも、近世の小溝状遺構群を振り上げた後に礎石跡の根固め石上面の検出までを行い、さらに各溝跡については構造や時期解明のために一部を振り込んでいる。さらにS X 8についても性格の究明から瓦溜り部分の北半分を振り込み、多量の瓦を採取している。記録はプランの平面・断面図と写真記録をとった後、調査区壁面に加え、捜索を利用して多くの断面記録をとった。調査終了後には石敷きや礎石跡などの縁を組んだ遺構保護の必要性から、遺構面全体に不織布やシートによる養生作業を行なった上で掘削土により埋め戻した。

平面図作成の基準は、調査区の四隅に杭を設置し、任意の座標系を基に作図した。座標杭名は調査区の北西端に設置したものを原点とし、南及び東に行くにしたがいその距離を数值で示している。またこれらの調査区杭には後に世界測地系直角平面座標系による座標数値を与えており、座標数値は以下の通りである。

(S 0・E 0) : X = -195,681.657 Y = 5,988.666 (S 0・E 14) : X = -195,685.034 Y = 6,002.257

またこの調査で再検出した第4次調査第3試掘区の遺構に関しては、今回の調査で得た新たな知見を加え、以下に報告している。

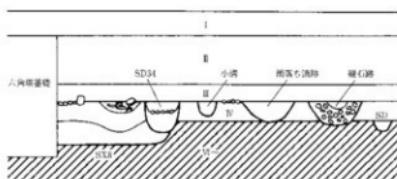
2 基本層位

基本層はⅠ層からⅣ層までを確認した。

Ⅰ層は表上である。Ⅱ層は近現代の盛土で、他地区同様に刑務所施設にかかる瓦片や煉瓦、焼土など、様々なものが混入している。しかし倉房基礎の硬く叩き締めたような部分は確認できない。

Ⅲ層は均質な土壌で、近世の畑耕作土である。3つに分層でき、この違いが深度や時期など耕作の違いを示しているものとみられる。特にⅢc層は下位に存在した石敷きを巻き上げることにより縁の混入が著しく、Ⅲa・Ⅲb層ほど縁が少ないとわかる。

Ⅳ層は若林城造営に伴う石敷きと整地層で、ここでは4層に分層できる。Ⅳa層は南半部に広がる石敷造構の縁である。Ⅳb・Ⅳc層は北半部に見られる残存範囲が狭い細砂層とシルト層で、礎石建物跡などの検出面となっている。Ⅳd層は全域に確認できる砂質シルト層で、灰黄褐色シルトブロックを含む層である。Ⅳd層は南半部では石敷造構直下にみられることから、Ⅳb・c層は建物下に限って整地された層の可能性があり、用途により整地の仕方を違えたことが推定される。



第12図 基本層位模式図

たこの地区では整地層下の旧表土であるV層は確認されておらず、整地に際し、土を入れ替えたものとみられる。この状況は第5次調査区でも広く確認されている。

VI層より下層は褐色の砂質シルト・砂質土で、自然堆積層とみられる。IV層下で検出した若林城期以前とみられる溝跡はVI層面でのものである。またVII層やVIII層は細緻層で埋め面が安定せず、部分的に円礫を多量含む箇所もあることから、調査区周辺にはその起源となった小河川跡が埋没するとみられる。

層位	土 色	特 徴	層位	土 色	土 色	特 徴
I	10YR4/3 にぼい黄褐色	砂質シルト (表土・盛土)	IVb	10YR4/6 褐色	砂質土	褐色 (1cm以下の黄褐色シルトブロックを含む)
II	10YR4/6 黄褐色 - 10YR2 黑褐色	砂質シルト (現地の土塊による混合層 透水性の強度)	IVc	10YR3/3 黄褐色	シルト	黄褐色砂質シルトブロックを多く含む
Ⅲa	10YR4/4 褐色	砂質シルト (10cm以内の円礫を少量含む)	IVd	10YR4/4 褐色	砂質シルト	1cm以上の黄褐色砂質シルトブロックを含む
Ⅲb	10YR3/4 喀斯特色	砂質シルト (10cm以内の円礫を少量含む)	V	10YR4/6 褐色	砂質シルト	灰黄褐色シルトブロックを斑状に陥入含む
Ⅲc	10YR4/4 褐色	砂質シルト (10cm以内の円礫を多量含む)	VI	10YR4/6 褐色	砂質土	(細粒)
IVa	(石数) (径15cmまで15cm)	—	IVb	10YR4/4 褐色	砂質土	(細粒) (10cm以内の円礫を多量含む)

第4表 基本層位

3 検出遺構

（1）若林城期の遺構

ここで扱う遺構はIV層面で検出したもので、遺構の構造、配置、方向性、他遺構との重複関係などから判断したものである。各遺構の時期は若林城の存続した江戸時代初期の寛永年間に限定できるものと考えられる。

5号礎石建物跡（SB5）

北半部のIVb層面で検出した。礎石跡1~10とS D32で構成される東西5間（9.85m）かそれ以上、南北1間（1.97m）以上の建物跡である。南北の柱列の方向は東傾11°だが、建物の全容がつかめない事から、向きは不明である。西側から3列目の南北2つの礎石跡は刑務所施設の基礎により失われている。全ての礎石が失われ、かつ調査では根固め石上面の検出に留めたことから厳密な数値は求められないが、柱間は概ね2m弱の6尺5寸程度とみられる。さらに南北柱列2列の西側延長上で礎石跡西辺から2.6m程度の位置にP7と8を検出したが、同建物の柱跡の可能性もある。建物の東側への延びは不明である。また現時点では柱列2列の検出にとどまることで、建物をつなぐ廊下の可能性も否定できない。他遺構との重複は礎石跡4が小溝群8群より古く、礎石跡1がS D38より新しい。

（礎石跡）

10基とも残存状況は極めて悪く、上部の大部分は近世の耕作により壊されている。掘り方規模は大きなもので70~85cmの円形を基本とするが、残存の悪さから礎石跡6や8のような不整形となるものもある。検出段階で7基の中央に礎があり混入しない部分を確認した。これは礎石の抜取り跡の可能性もあり、径が20~30cmのわりと明瞭なものから、50cm以上の不明瞭なものもあるが、検出レベルからみてこれらが全て抜取り跡であるかは不明である。

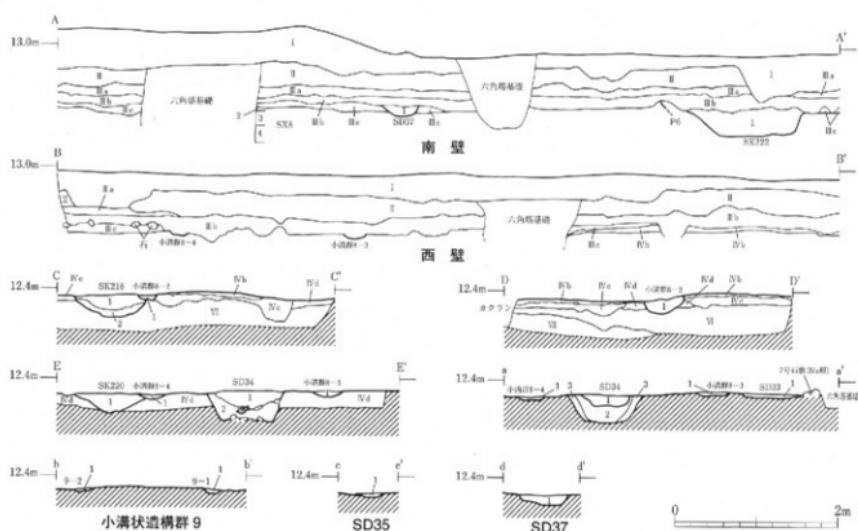
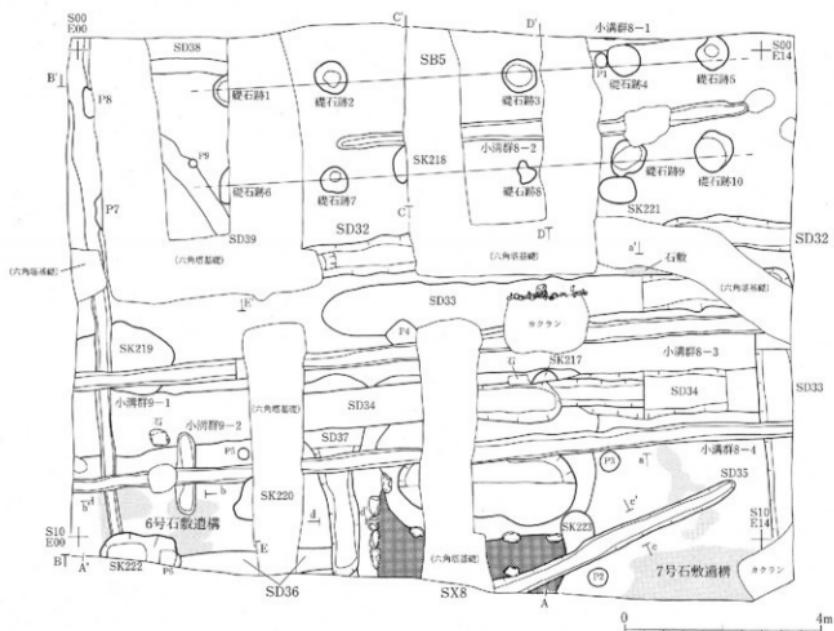
根固め石の状況は礎石跡2・3・10のように礎が一定の密度で充填されたものがある一方、他の多くは埋土内に礎が混入するといった程度である。礎は大きなものが14cmで、5~10cm程度のものが多い。礎石跡5と10の礎上面の確認をしたところ、掘り方の底面近くのためか礎は密には入らず、砂礎が多く入れられていた。このことから礎石基礎は掘り方内に砂礎を入れた後に小型礎を入れ、その最上面に大きめの礎を組む構造であり、検出した礎石跡はその上半部を欠いたものといえる。第5次調査では掘り方底面や壁面に砂礎混じりの粘土を貼ったものもあったが、今回は確認されなかった。

（雨落ち溝跡）

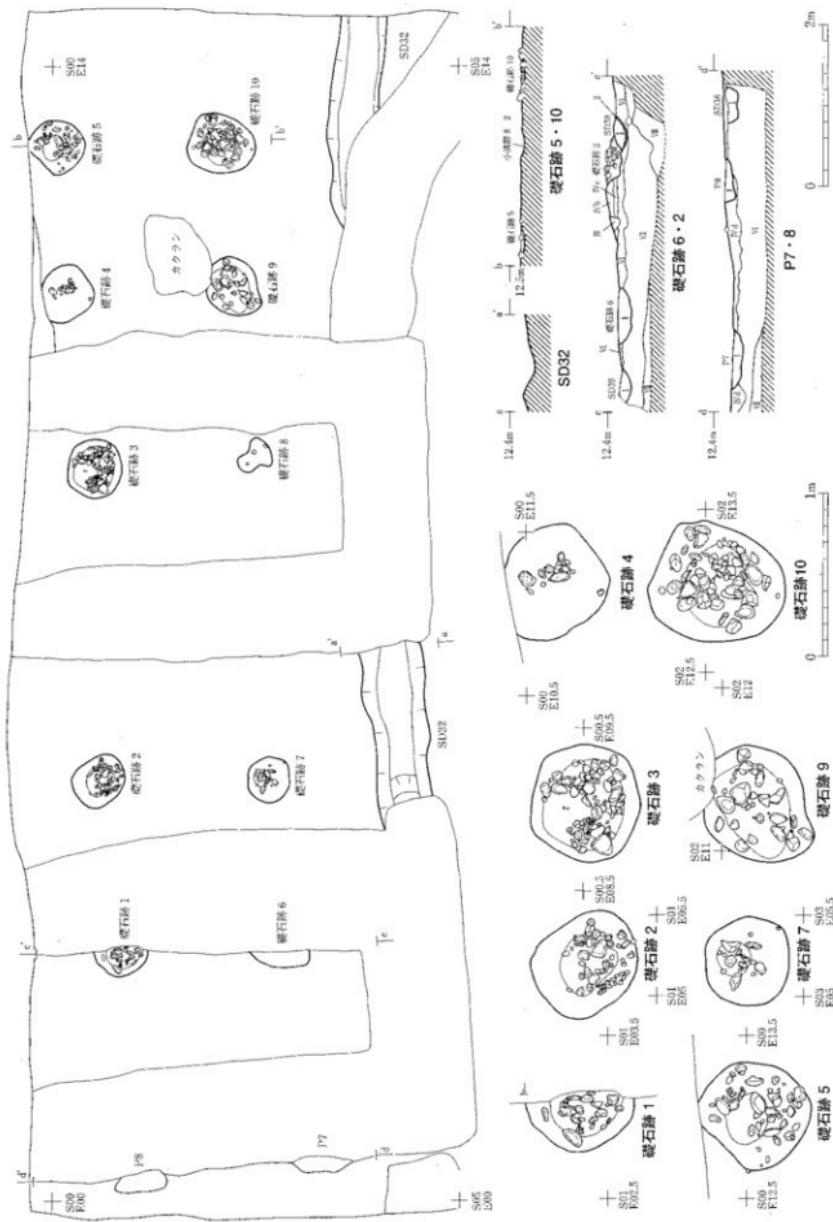
建物に沿って東西に走るS D32は南側の雨落ち溝とみられ、南側柱列との間隔は1.6mである。断片的な検出であったが、幅は60~75cm、深さは10cmにも満たないもので、底面に敷石などの構造はみられず、掘り方底面近くの残存と考えられる。溝跡は東側では調査区外に延びるが、西側は不明である。

（P7・8）

2基とも円形のプランとみられ、深さは15cm程度で堆積土内に円礎の混入はほとんど無いが、位置的にみて建物を



第13図 遺構配置図・基本層位図ほか



第14図 5号礎石建物跡

構成する礎石跡の可能性もある。礎石跡1と6からの距離は2.6mであり、これが建物の構造上の違いを示す可能性もある。

第5次調査の3号建物跡西辺の柱列は、他の礎石跡に比べて小規模で縫が入らないビット状の並びで構成されている。

36号溝跡（SD36）

第4次調査で検出していたものである。第5次調査検出建物群の調査例からみて建物周囲に巡る雨落ち溝と考えられ、溝跡の南側調査区外に建物が存在するとみられる。今回は新たにSX8との間部分を検出した。方向は西傾79°である。底面に敷かれた板状の割石と掘り方のみの残存で、壁面は壊され、東側は敷石も外れていた。掘り方の残存は幅55cm、深さ15cm程度である。敷石は玄武岩質の石材を用い、風化した平坦面を上にし、溝底面としている。敷石の幅は25cm程度で2列に敷かれ、各敷石とも壁側を直線状に削えているのがうかがえる。本来は敷石上には径の小さい玉石が敷き詰められていたと考えられる。側石の抜取り穴は検出されず、溝の上部構造は不明であるが、側石があった場合は川原石ではなく、掘り方を伴わない割石であった可能性もある。他遺構との重複はSK222とSD37に切られている。また溝跡がSX8の西側で止まるか、または南に折れていたかは確認できなかった。

6号・7号石敷遺構

6号石敷遺構は調査区南西側、7号石敷遺構は南東側に検出された。近世の耕作により著しく乱されており、幾つかの小範囲で確認できるのみである。疊は径が5cm程度のもので、部分的に石敷下に敷かれた砂礫が広範囲に残存しているが、SD32より北側には確認できない。二つの石敷遺構はSX8を除く建物南側の広い範囲に敷かれていた一連の施設と考えられる。

8号性格不明遺構（SX8）

第4次調査で石敷と石列とした遺構である。規模は遺構の外枠となる掘り方の東西が5.3m、南北が4.5m以上で、深さは45~60cmである。構造は底面がほぼ平坦な隅丸方形の掘り方の壁際に土を入れた後、東西石列により区画した北側の石積み部を中心に円礫を充填し、さらに南側の石敷き部上面には粒の小さな玉石を厚く敷いている。SX8は構造からみて、池跡とその周辺の施設の可能性がある。

（石積み部）

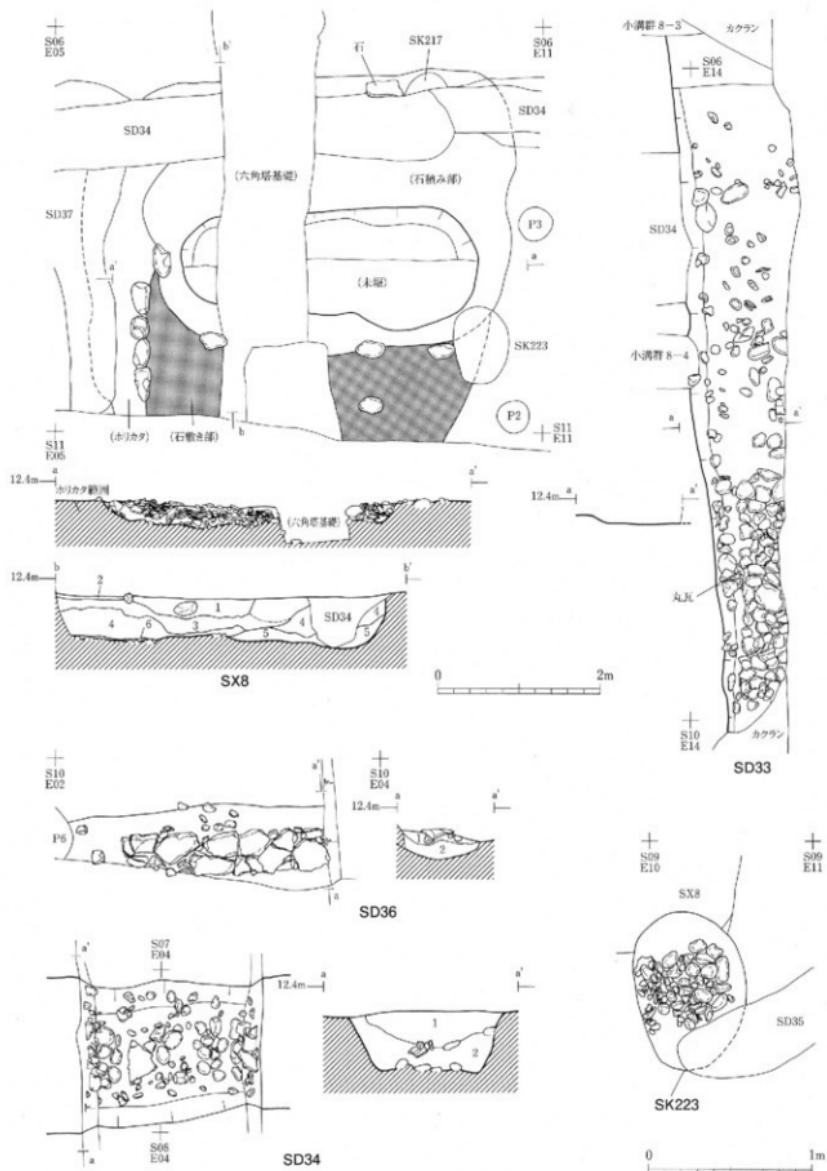
形状は東西に長い隅丸長方形で、やや南側に寄って東西に長いくぼみがある。南北規模は3.3mである。石積み面は石敷き面に比べてわずかに低く、特にくぼみ周辺は傾斜しながら低く造られている。擾乱を利用した下部構造の断面観察では、円礫による積石はくぼみ北縁側で幅70cmほどで、上半部密度が高く、下半部やくぼみの下部、さらに右敷き部下部では円礫に加え、砂礫を多く入れている。また北端や西端では石積みと掘り方の間に土を入れるのに対し、東端では掘り方に直接石が積まれている。

くぼみは東西3.65m、南北1.05~1.5mの西側が狭い不整梢円形で、深さは20~30cmである。壁面がやや緩やかなことから底面は狭くほぼ平坦である。くぼみ内には様々な種類の瓦片が大量に入れられており、出土状況からみて瓦は施設の一部ではなく、施設が機能しなくなった後に廃棄されたものと考えられる。

（石敷き部）

石積み部の疊は径がやや大きく砂礫が混じるのに対し、石敷き部の疊は径が5cm程度の小疊のみを選別し、厚く敷いており、周囲の6・7号石敷遺構よりも入念に造られた事がわかる。また石敷き部下の掘り方底面にも疊を敷いていた可能性がある。

石敷きの北及び西端は石列により区画されている。北側の石列は3石確認したが、擾乱により間の1石が失われたとみられる。石は長径33~35cm、短径17~20cmと細長く、上面は平坦ではなく、全て長軸を東西方向に向け直線的に配置している。石間は西側が1.9m、東側が0.9mである。また東から2石目の南側70cmの石敷き内にも東西を向いた同様の石が置かれている。西側の石列は4石あり、北側にやや離れた1石は当初の位置をずれたものとみられる。石列は東西列とは異なり長軸を合わせた石同士が接している。石は長径30~40cm、短径18~23cmと東西列と



第15図 8号性格不明遺構ほか

ほぼ同様の大きさである。これら二つの石列は耕作により大きく位置を変えていないことから、これより下位レベルの石敷き面も当初の状態を保っているものと考えられ、さらに低い石積み部でも同様の状況が推測できる。

整地層（N層）

北半部の建物跡や南半部の石敷造構の下部には城造當時の整地層がほぼ全城にわたり確認でき、施設の配置に関わらず、一定の整地が成されている事がわかった。またこの地区では整地層は3層に分層されたが、これは積み方の違いで、時期差を示すものではないと思われる。整地は北半部で20cm程の厚さがあり、若林城期の施設は全てこの層の上面で検出されているが、整地層もまた城の造構堆積上同様、後にかなりの厚さが耕作土になったとみられる。

（2）若林城期以後の造構

ここで扱う造構は石敷き上やIV層上面で検出したものであるが、若林城の造構と重複関係を持ち、これより新しいものである。時期は若林城廢城後の近世と考えられる。

土 坑

土坑は7基を検出した。礎石建物跡やS X 8と重複するほか、小溝状造構群との重複もみられる。形状は橢円形や不整形など様々で、大きさは最も大きなSK 219が2m以上、最も小さなSK 221が80cmである。堆積上に共通性は認められず、その用途は不明と言わざるを得ない。SK 223内には径が最大で15cmの円縫が密に詰まっており、建物跡との関連も問われたが、縫の大きさや詰め方から、耕作の障壁となった縫を穴に埋めたものと考えた。土坑としたものの中にはこのような耕作の痕跡があるとみられる。

溝 跡

溝跡は4条を確認した。SD 33は東西方向の溝跡が調査区東壁際で南に曲がる。方向は東西溝で西傾80°である。西側の残存状態が悪い。溝幅は東西が75~95cmと差があるがこれも残存程度によるもので、南北も同様の幅とみられる。東西溝を一部掘り込んだところ、深さは5cm程で底面は平坦であった。堆積上中には径10cm内の円縫を含んでいる。南北溝は深さ10cm程で、堆積上中からは瓦片が多数出土した。北半部の底面では東西溝と同様に混入した円縫の数量が多かったが、南半部では長さ1.5mにわたり径10cm内の円縫を敷き詰めており、このことから北半部や東西溝は石敷きが壊された掘り方底面の状態である事がわかった。このような円縫のみによる底面の石敷きはこれまで例が無く、縫に挟まれた形で瓦片が出土したことやSD 34との重複関係より、SD 33を廢城後に構築した溝と判断した。SD 33はSD 34より新しく、小溝群8より古い。

SD 34はSD 33の南側に平行して走り、方向は同じ西傾80°である。検出時点での幅は西側が広く1.3mだが、中央から東側にかけては70~100cmと狭くなり、途中で極端に狭い箇所がある。擾乱を利用した西側での掘り込みでは、深さ35cmで断面形は逆台形で、堆積土中には多くの円縫や瓦片が混入していた。底面には径が3~13cmの円縫が粗く敷かれ、玄武岩質の割石もわずかにみられたが、石敷きは本来密に敷かれていたと考えられる。縫の下は掘り方底面となっているのに対し東側では構造が全く異なり、深さ35cmの掘り方内に幅60cm、深さ15cmの狭く浅い溝本体が造られたものである事がわかった。東側では底面に石敷きは確認できない。さらに両者の接続点では掘り方自体浅く、掘り方を溝としている。これらの形状からSD 34は上流側とみられる西側より流れれる水の上水だけを東側に流すなどを意図した溝と考えられる。掘り方理土からは瓦片が出土している。他造構との重複はSX 8、SD 37、SK 217・219より新しく、SD 33、小溝群8・9より古い。SD 34はその配置からSX 8への引水施設の可能性も考えたが、造構間の重複関係や瓦の出土状況から直接は関係しないものと判断した。

SD 35は東傾79°と城方向に対し斜めに走る造構である。最大幅が45cm、深さがわずかで、一見すると小溝状造構に類似しており、残りの悪い耕作痕跡の可能性もある。

SD 37は南側では幅50~60cmの溝状のものが、北側では広がり上坑状を呈するものである。他造構との重複はSX 8より新しく、小溝群8より古い。この溝跡もまた小溝群9との距離を考慮すると、同造構の一部の可能性もある。

細 跡（小溝状遺構群）

8群と9群の2つのまとまりを検出した。8群は東西方向の4条を検出し、方向は西傾82°である。溝幅は30~50cmと残存状況により差があり、深さは5cm足らずである。溝間は8-3と8-4が2.2mで一定し、8-3と8-2が4.4mと、間の小溝が失われた可能性も考慮すると、概ね同値であるに対し、8-1と8-2が1.7mと狭い。9群は南北方向の2条を検出し、方向は東傾10°である。溝幅は25~50cmで、溝間は1.6mである。両群は直交することで時期差はあるが、いずれも城方向に沿った耕作が行なわれていたものと考えられる。他遺構との重複はSK222を除き、今回検出したほとんどの遺構より新しく、最終段階にあたる遺構である。

ピット

10個を確認した。前述のP8と9を除き、他に組み合うものは無く、柱痕跡も確認できなかった。

(3) 若林城期以前の遺構

溝跡

北西側で2条の溝跡を確認した。断面観察では溝跡がIV層下にあることから、整地以前の遺構とした。SD38は西傾75°で、幅30cm、深さ20cmの小規模なものである。断面形は弧状で堆積土2層は底面から壁面全体にかけてのシルト質土である。SD39は西傾23°で、幅40cm、深さ20cmの断面形が弧状の溝跡である。第6次調査では平安時代かそれ以前の畠跡が確認されているが、これらの溝跡は単独の遺構とみられ、断面形状や堆積土からみて耕作痕跡とは性格の異なったものといえる。

5号礎石建物跡（SB5）

遺構	層位	土色	土性	特徴	遺構	層位	土色	土性	特徴
遺構P1	表層地	10YR4/4	褐色	砂質シルト	遺構E4	掘り方	10YR4/4	褐色	粘質シルトブロックを多量含む
掘り方1	10YR4/4	褐色	シルト	堆積シルトブロックを多く含む	掘り方7	掘り方	10YR4/4	褐色	砂質シルト・堆積色シルトブロックをやや多く含む
遺構G1	表層地	10YR2/4	暗褐色	砂質シルト	堆積7	堆積地	2.5YR8/8	灰褐色	砂質シルト・堆積色シルトブロックをやや多く含む
掘り方1	10YR4/6	褐色	砂質シルト	堆積色シルトブロックを多く含む	堆積8	掘り方	10YR4/4	褐色	砂質シルト・堆積色シルトブロックを多量含む
遺構P2	表層地	10YR4/4	褐色	砂質シルト	堆積9	表層地	10YR4/4	褐色	砂質シルト
掘り方1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	堆積色シルトブロックをやや多く含む	堆積10	掘り方	10YR4/4	褐色	砂質シルト
遺構P3	表層地	10YR4/4	褐色	砂質シルト	堆積11	堆積地	2.5YR8/8	灰褐色	砂質シルト
掘り方1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	堆積色シルトブロックを少量含む	堆積12	掘り方	10YR4/4	褐色	砂質シルト
遺構P4	表層地	10YR4/4	褐色	砂質シルト	堆積13	堆積地	2.5YR8/8	灰褐色	砂質シルト
掘り方1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	堆積色シルトブロックをやや多く含む	堆積14	堆積地	2.5YR8/8	灰褐色	砂質シルト
遺構P5	表層地	10YR4/4	褐色	砂質シルト	堆積15	堆積地	2.5YR8/8	灰褐色	砂質シルト
掘り方1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	堆積色シルトブロックを少量含む					

土坑（SK）

遺構	層位	土色	土性	特徴	遺構	層位	土色	土性	特徴
SK217	1	10YR4/2	暗褐色	砂質シルト	SK220	1	10YR4/4	暗褐色	砂質シルト・以降地盤色シルト・褐色を含む
1	10YR4/6	褐色	砂質土		SK221	1	10YR4/4	暗褐色	砂質シルト・以降10cm以内の内壁を少量含む
SK218	2	10YR4/6	褐色	砂質土	SK222	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト・堆積色シルトブロックを多量含む
1	10YR4/2	暗褐色	砂質シルト		SK223	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト・以降10cm以内の内壁を少量含む

溝跡（SD）

遺構	層位	土色	土性	特徴	遺構	層位	土色	土性	特徴									
SD22	1	—	—	—	SD25	1	10YR4/3	暗褐色	砂質シルト									
SD33	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	2	2	10YR4/4	暗褐色	砂質シルト									
2	10YR4/6	褐色	砂質シルト	SD34	1	10YR4/3	暗褐色	砂質シルト	SD35	1	10YR4/3	褐色	砂質土	SD36	1	10YR4/3	褐色	砂質土
SP34	2	10YR4/4	暗褐色	砂質シルト	SD37	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト									
3	10YR4/2	暗褐色	砂質土	SD38	1	10YR4/4	褐色	砂質土	SD39	1	10YR4/2	暗褐色	砂質土					
SD35	1	10YR4/4	暗褐色	砂質シルト	SD39	1	10YR4/4	褐色	砂質土									

性格不明遺構（SX8）

層位	土色	土性	特徴	層位	土色	土性	特徴
1	10YR4/4	暗褐色	シルト	4	10YR4/2	暗褐色	シルト
2 (石抜き跡)	近5cm以内の内壁に	石を含む	瓦を当に、内壁に瓦を含む(瓦張り)	5	10YR4/1	褐色	砂質土
3 (石組み跡)	近5cm以内の内壁に	石を含む	壁面に石を含む(瓦張り)	6	10YR4/3	暗褐色	砂質シルト(近1cm以内の内壁が灰状となる)

小溝状遺構群

遺構	層位	土色	土性	特徴	遺構	層位	土色	土性	特徴
小溝跡-1	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	小溝跡-1	1	10YR4/2	暗褐色	砂質色砂質シルトブロックを多量含む
小溝跡-1	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	小溝跡-1	1	10YR4/4	褐色	砂質土
小溝跡-1	1	10YR4/6	褐色	砂質土	小溝跡-1	1	10YR4/4	褐色	砂質土(近5cm以内の内壁を少量含む)

ピット（P）

遺構	層位	土色	土性	特徴	遺構	層位	土色	土性	特徴
P 1	1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	P 6	1	10YR5/6	暗褐色	砂質色ブロックを少量含む
P 2	1	10YR4/2	暗褐色	砂質シルト	P 7	1	10YR4/6	褐色	砂質シルト
P 3	1	10YR4/2	暗褐色	砂質シルト	P 8	1	10YR5/6	暗褐色	砂質シルト
P 4	1	10YR4/4	暗褐色	砂質シルト	P 9	1	10YR4/6	褐色	砂質シルト
P 5	1	10YR4/3	暗褐色	砂質シルト	P 10	1	10YR3/4	褐色	砂質シルト

第5表 遺構層位

4 出土遺物

遺物の出土は遺構検出時や一部で掘り込んだ遺構に加え、基本層中やカクランからのものである（表7参照）。中でもS X 8からの出土が突出しており、これは遺構内の瓦を採取した事によるものである。また他ではSD33や34が多く、基本層では遺構面直上のⅢ層中からの出土が目立っている。しかしS X 8出土以外の遺物は本来の位置を保っていないものと考えられる。

（1）瓦

種類別で多いのは平瓦で、重量でみると次に多いのは駁斗瓦である。また輪違いや面戸瓦は数量こそ少ないが、完形品や接合資料が多いのが特徴である。全体に破片資料が多いため瓦の分類は難しく、中には丸瓦と輪違いの区別がつかないものが一定量あった。

軒丸瓦 全体形がわかる3点（F1・6・7）は尻部に後続する丸瓦と接続する上縁部が無く、一般的に行基式ともいわれる形状であるが、丁寧な仕上げで全体に丸くすぼまるものである。釘穴は確認できない。文様のわかる6点は全て周囲に珠文を配した三巴文で、第6次調査で出土した三巴文のみのものはみられず、家文系などの他の文様瓦も出土していない。巴は全て左巻きで、珠は21個程度で径1cmのもの5点のほか、珠が17個で径1.4cmと大きいもの（F3）が1点ある。前者の瓦当径は17.0～17.2cmで内区径が12.4～13.1cmであるのに対し、後者は19.3cm、14.6cmと大型である。長さはF1が31.8cm、F6が30.4cmに対し、F7は24.9cmと極端に短い。

玉縁の付く軒丸瓦は仙台城跡などでも多数出土し、一般的に見られる形状であるが、尻部が丸くすぼまるものの出土例は少なく、二の丸跡で全体形のわかる三巴文の軒丸瓦と小型の丸瓦がわずかに出土している程度である。仙台城本丸跡や松島端嚴寺の瓦を焼いた大沢窯跡などでは行基式の丸瓦や不明瓦としており、瓦当を伴ったものは出土していない。今回出土した両端の残る3点は、後続する丸瓦との接続は難いことから、建物の大棟下部に笠桟として組まれたものか、降棟に沿って葺かれた掛瓦、さらには玄関庇の脇部分など、通常の軒先とは異なった場所に葺かれたものの可能性がある。このような軒丸瓦のみの出土は特徴的で、廃城時における瓦の廃棄や移築先での瓦の再利用の傾向を考える上でも興味が持たれる。

丸 瓦 出土した丸瓦のほとんどは玉縁付きのもので、両端が残るものの中では行基式は出土していない。F8・9・12・14・15・16・17は全体の長さが30.2～35.7cm、幅15.5～17.8cm、高さ7.8～9.6cmである。F14は他と比較すると小型である。また大きなものは厚く、玉縁が長い傾向がある。これに対しF20は本体だけの長さが38cm以上、幅15cm、高さ7.1cmと細長く特異なもので、玉縁を有する可能性がある。F18・19は尻部が行基式となるが、F18に関しては広壇部側の反り具合や短さからみて軒丸瓦の可能性がある。またF19が丸瓦であった場合は棟や破風下に入る上端の丸瓦の可能性も考えられるかもしれない。丸瓦全体の傾向として、凸面は縦位の強めのナデの後、両端を幅広い弱めのナデで仕上げている。凹面は布目や横位のコビキ痕に加え、弧状の鶴肝痕や成形した瓦を軸から外す際の棒状具による刺突痕がみられる。布目は本体と玉縁の接続部分でよじれている。F15や軒丸瓦の可能性もあるF18・19の尻側には径15～16mmの釘穴がある。またF9の玉縁近くの凸面中央に「回」という精緻な刻印がみられ、これは半瓦の小口にみられる「○」とは全く様相を異にしたものである。

軒平瓦 形状から瓦当面幅が一定なものと顎下部が尖り、高さのある滴水瓦がある。前者は中心飾りが三葉文のもの7点（G1・2・3・4・5・11・12）、桔梗文のもの2点（G8・38）、不明2点（G9・10）で、脇は全て唐草文である。G10は凸線状に表現され唐草のみの残存で、端の唐草は上巻きである事から、中心は桔梗文とみられる。また未掲載だがG9は内帯状の唐草で、他との比較から中心飾りは三葉文とみられる。大きさは三葉文の軒平瓦は瓦当部の幅が24.8～26.2cm、高さ4.0～4.9cm、内区幅15.7～16.0cm、内区高さ3.0～3.5cmである。長さがわかるものはG3の28.3cm、G5の27.0cmのみである。桔梗文は全体を知る資料は少ないが、G10は花弁が剣形で太く、瓦当面の高さが5.1cmあり、全体に三葉文の軒瓦よりやや大きい可能性がある。

これまでの調査で出土した軒平瓦の文様は今回と同じ三葉文と桔梗文のみで、数量からみた場合、この地区では三葉文が主体といえるが、これが当時好かれていた瓦の傾向を示しているかは不明である。またG3の狭端部小口に三引両に似た形状の小さな刻印がみられる。

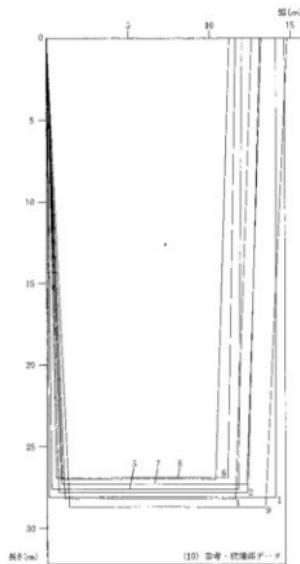
滴水瓦は5点出土した。全体形がわかるものは無いが、G7は瓦当面幅29.0cm、内区幅22.3cm、長さ33.6cmで、通常の軒平瓦と比較して大きなものである。中心飾りは上下左右に配された四葉の花菱で、唐草は線を凸線で描き、全体を浮き上らせている。第5次調査で1号建物跡の北側雨落ち溝より同様の形状や意匠をもった滴水瓦の完形品が出上している。大きさは瓦当面幅30cm前後、内区幅22.4cm、狭端部幅27.9cm、長さ32.6cmと今回の出土品とほぼ同様である。

平瓦 平瓦は最も出土量の多い瓦であるにもかかわらず、全体形を残すものは少ない。長さがわかるものは4点の27.1~28.5cmで、広端幅は3点で25.0~28.9cm、狭端幅は2点で24.0~27.2cmである。ちなみに第5次調査で出土した平瓦の完形品は長さ32.8cm、広端幅は29.9cm、狭端幅は27.2cmと大きく、滴水瓦とほぼ同値である。凹面の調整はやや強い横位のナデを施した後、四方の縁に沿って幅広い弱いナデを施している。凸面は全面にナデ調整が残るが、凹型台による凹面調整のためか不明瞭となっている。

G16は平瓦凹面の狭端部側から右側面にかけて弧状の土手を貼り付けたものである。土手は凹面中央では幅2cm程度で低いものが、側面部分では高さ1.2cmとなり、さらに広端部側にのびるに従い高くなることが推定される。土手は雨水の漏れを防ぐ「水返し」で、この瓦は掛瓦として降棟際か反りのある隅屋根あたりに葺かれたものとみられ、前者の場合には瓦当面を有していた可能性がある。この種の瓦は仙台城本丸跡のほか、大沢窯跡でもわずかに出土しており、大沢窯跡の平瓦は側面部土手の高さが8cmにもなり、17世紀中頃のものとしている。

平瓦には小さな刻印が12個確認された。刻印には文字や花文など手の込んだものは無く、その多くは竹管などによる小さな円を中心とする。形状は単独円のほか、二個並列、半円、半円重ねがあり、円径は4.5mm~10mmと様々である。また刻印以外にヘラ書きの印が1点あり、これらは全て小口面に刻まれている。

熨斗瓦 形状のわかる10点を掲載した。平瓦を半裁したもので、片側面に分割線を残し、焼成後に分割したもの(H1・3・4・5・6・7・9・10)や焼成前に分割し、分割面をケズリ調整したもの(H2・8)がある。長さは26.9~32.2cmで、広端幅が11.2~14.8cm、狭端幅が9.5~14.6cmである。H10は他と比較し大きなもので、素材の平瓦白体が大きいことがうかがえる。凹凸面の調整は平瓦と同様のナデで、特別な調整は施されない。分割線の刻みは鋭く、深さは2mmと極端に浅いものから8mmまで様々である。また凹面には分割線とは別にヘラ工具による直線や弧状の刻線が認められる。刻線は2~4条で、幅狭く鋭いもの(H1・2・8)や幅広く緩やかなもの(H10)があり、これらは積み重なる熨斗瓦の滑り止めを意図して切られた溝とみられる。H13は接合資料で、分割が良好でないにもかかわらず、使用された瓦とみられる。接合した平瓦の長さは28.1cm、広端幅25.3cmは平瓦G17とほぼ同じ大きさである。

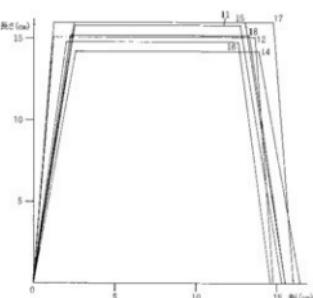


第16図 熨斗瓦

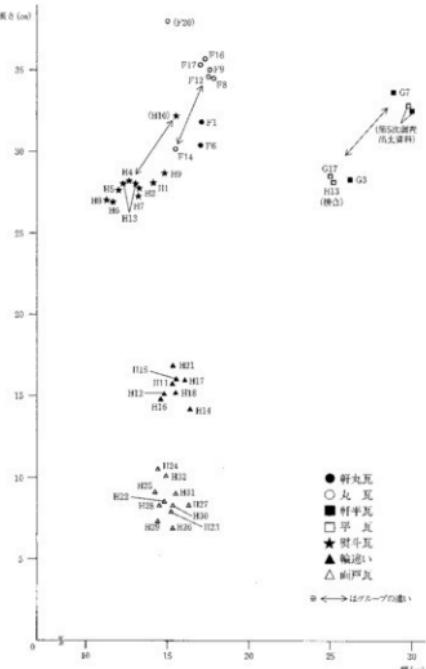
輪違い 輪違いは狄端部側が直線的に狭まるものと軒丸瓦の尻部のように全体に丸みをもつてすぼまるものがある。前者はH12・13・16・17・19で、平均長15.5cm、広端幅15.1cm、狄端幅12.5cm、高さ6.4cmである。凸面は弱いナデで、四面は両側と狄端部に幅広の面取りをしているが、H12を除き広端部にはみられない。後者はH11・14・15・18・20・21で、丸みを丁寧に成形したもので、破片のため丸瓦と区別のつかないものも多数ある。平均長15.6cm、広端幅15.6cm、狄端幅10.8cm、高さ7.0cmで、長さは前者と同様だが、狄端部が丸まり狭くなる反面、高さがある。凹面は広端部以外が面取りされ、丸瓦同様に狄端部側に布目とのじれがみられる。両者は丸瓦類と共通の特徴を有する一方、凸面調整の縱方向の強いナデはみられず、凹面に繩圧痕や棒状具の刺突痕も認められない。また丸瓦の幅の平均が17cmなのに対し、輪違いの広端幅は15.4cm、狄端幅11.6cmと狭く、全体が薄く、弧の長さも短い傾向がある。長さは丸瓦の1/2程度である。このことから、輪違いの製作にあたっては、丸瓦類を転用する以外にほぼ同様の製法により専用に作ったものが存在する可能性も考えられる。二つの形状の違いがどのような意味をもつのかは検討課題といえる。

面戸瓦 丸瓦を横にスライスしたような形状で、短軸となる長さは6.9~10.5cm、幅は14.2~16.3cmで、丸瓦幅より幅狭である。形状は長く幅狭のものから短く幅広のものまで様々である。高さは丸瓦の8.7cmに対し6.8cmと低く、この数値は輪違いとほぼ同値である。厚さは丸瓦より薄い傾向にある。ただし丸瓦で唯一小型のF20は幅15cm、高さ7.1cmであり、面戸瓦に近似した大きさである。

面戸瓦の両側面は平瓦の凹面と合うように三辺の面取りや弧状に仕上げている。凸面調整はほとんどが横位の弱いナデで、丸瓦の調整とは異なる。凹面の両小口側には幅広いケズリによる面取りがされるがケズリ幅は様々



第17図 輪違い



第18図 面戸瓦

第19図 各種瓦の法量分布

である。中にはH23のように凹面全体がケズりのものもあり、葺く際に表側にならない凹面のケズリは瓦の軽量化を意図したものと推測される。また凹面中央にはコビキ痕や布目以外に縄压痕や棒状具の刺突痕は認められない。しかしH29・32の形状は軒丸瓦の尻部や輪違いの一端と類似しており、これが戸瓦本来の形状とは考えにくく、戸瓦の中にも専用に作られたものの他に、丸瓦類や輪違いの焼成前の素材を分割した転用品が存在すると考えられる。

隅切瓦・その他の瓦 隅切瓦の出上はわずかで、全て破片である。H34は丸瓦で、両端が同方向に斜めに切断され、鋭角部は50°である。凹凸面とも丸瓦同様の調整や痕跡がみられる。他には丸瓦の小口を多少残し切断したものもある。H35は平瓦を凹盤状に割り小さく成形したもので、凹凸面とも平瓦のナデ調整がみられる。割面の一端が研削されており、用途は不明である。

(2) 土師質土器

土師質土器はSX 8・SD33・34やⅢ層中からの出土が多い。器形は皿と壺で、後者は焼壺壺である。皿を8点、焼壺壺を4点掲載した。土師質土器の皿については、全て小破片なことからロクロ土師器との区別が難しく、これらの分類・集計に際しては、非ロクロ土師器のみを土師器とし、またある程度の復元により土師質土器と認定したもの以外の多くは「土師器か土師質土器」として集計している。

皿 底部資料が多く、形状を復元する事が難しいが、皿(13点)と小型皿(3点)に分類できる。皿は口縁径が4点で12.6~15.8cm、底径が12点で7.0~9.3cm、器高が2点で2.2~3.7cm、底部の厚さが12点で0.6~1.0cmである。全てロクロ調整でケズリなどの再調整はされず、底部には回転糸切り痕が残る。X9は内面底部が擦れているが用途は不明である。X1・2・3・7・9・13は煤が付着しており、灯明具として使用されたと考えられる。煤の付着位置は内外面全体のもの、上半部のもの、口縁部のみのものなど様々で、付着割合は多い。17世紀初頭から前葉の皿には煤の付着率が非常に高いとの見方(註1)もあり、今回の資料は同時に使用された傾向を示しているといえる。また小型皿は底径が3点で3.9~5.1cm、底部の厚さが3点で0.45~0.75cmである。皿同様にロクロ調整のみで再調整はされず、底部には回転糸切り痕が残るが、煤の付着はみられない。

焼壺壺 全てが二次的な被熱により内外面が赤色化している。掲載したのは底部のみのもの4点で、径は5.0~6.0cm、厚さは0.8~1.8cmである。外面は3点に回転糸切り痕が見られ、体部下端には連続した縦位のケズリが入るもの(X17・19)と横位の面取り状のケズリが入るもの(X18・20)がある。体部は上半で多少波打ちながら直立するものとみられ、叩き目や刻印などは確認できない。X18は手作りの丸底の底部に厚い底を付け足し、平らな底部としており、外面全体にはケズリが施されることから、他とは異なる製作技法と調整であることがわかる。

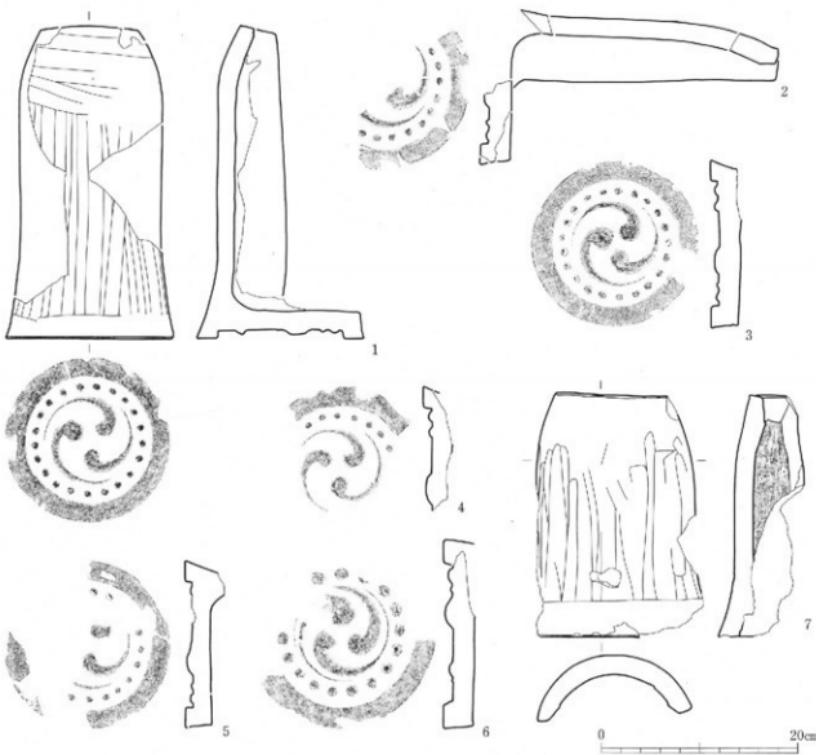
(3) 陶磁器

I5・7~12・15・17・19は丹波の擂鉢である。無釉で焼縮められており、ロクロ調整の後に外面の口縁部より下は指押さえの痕跡と弱いナデがみられる。底面はケズリ調整されている。内面の擂目本数は5本(I8・12・17)、6本(I13・18)、7本(I6・7・9・10・14)、8本(I5・6・11)、本数不明(I15・19)がある。これを基に同一個体の可能性も否定できないI8と12、I9と10と14を考慮した出土個体数は10~12個体と、出土数は多い。擂目幅は5本のものが16~17mm、7本が19~20mm、8本が24~25mmと、本数に応じ広くなるが、6本のものに関しては14mmと20mmである。口縁径はI5が30.0cm、I7が37.6cmと推定されるが、復元資料のため厳密な数値ではなく、底径のわかるものは無い。体部の傾きはI5が50°、I7が48°程度である以外は明らかでない。時期の目安となる口縁部形状は、断面が方形のもの(I7)、方形で内面側上方へ突出するもの(I8・9・11)、三角形のもの(I5)があり、他に内側に傾斜するもの(I17)がある。また内面の口縁部下には沈線状のもの(I8・17)と四線状のもの(I5・7・9・11)がある。丹波擂鉢の変遷は口縁部断面が方形から三角形となり、新しいものは擂日本数が増える傾向があるとされている。このことから出土品の中で古い様相のものはI7とI8で、新しいものはI5とみられる。

またI17も前者に含まれるものとみられ、これらの時期は17世紀初頭から前葉と考えられる。

I20~22は美濃の播鉢である。I20は内湾気味に立ち上がった体部が口縁近くで外反しており、口縁部の両端はY字状に突出し、内面に鋭い突帯が付いている。I21は内湾の度合いが強く、逆に内面の突出が弱い。I22は底部資料で底面には回転糸切り痕が残り、径は10cm程度と小さなものである。これらは特徴から17世紀前半のものとみられる。また岸窯系とみられる播鉢片が1点出土している。

その他の陶器としては17世紀前半の織部の大平皿や、16世紀末から17世紀初めの絵唐津の鉢や中国産の褐釉壺などがあるのみである。磁器は16世紀末~17世紀前半の中国産の青花や白磁で、小型の碗、鉢、皿などの小破片のみ14点と、わずかな出土である。国産品は全くみられない。播鉢以外の陶磁器については出土数が極めて少ないと言わざるをえず、そこにもまた城外に持ち出されたなど、特別な理由があるものと考えられる。

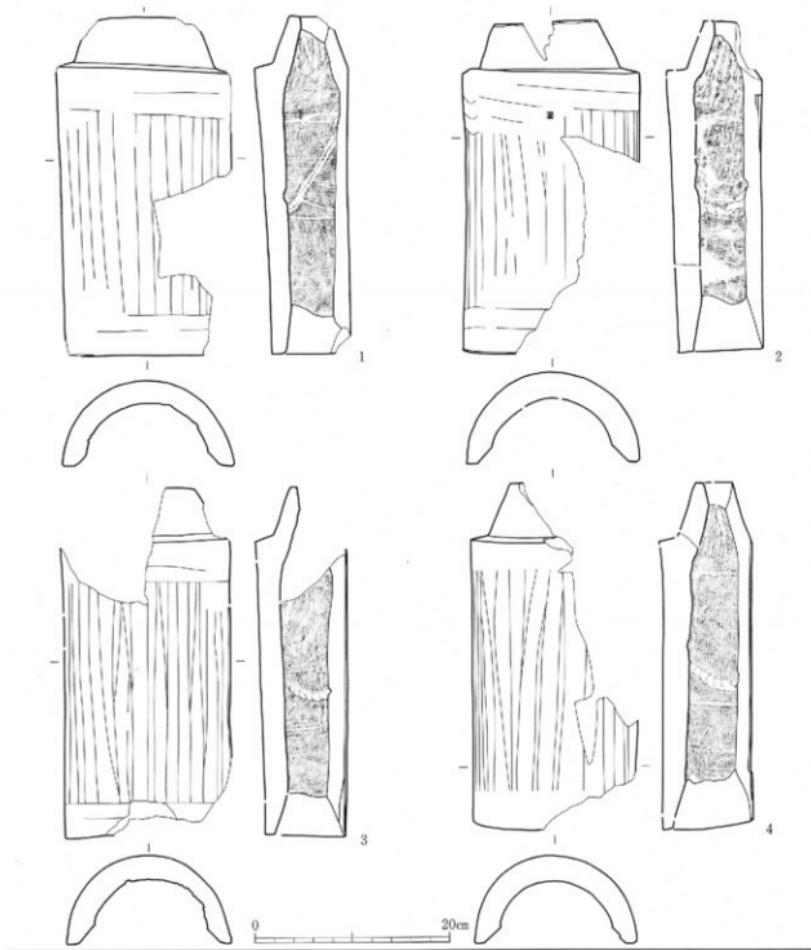


図版番号	登録番号	種類	造形・模様	文様	長さ(cm)	大きさ(cm)			重さ(g)	備考	写真番号	
						直径	内径	厚さ				
1	I-1	輪丸瓦	S X 8	織文二巴文	31.8	17.0	13.1	2.0	0.7	1.96	瓦当等: 巴字+二輪瓦(2-3) 滝桟1mm, 凹面ナデ, 回転コビキ面, 有目, 玉緑なし	10-1
2	I-6	輪丸瓦	S X 8	織文二巴文	30.4	(17.0)	(12.8)	2.1	0.7	0.83	瓦当等: 巴字+輪瓦(2-3) 滝桟1mm, 凹面ナデ, 回転コビキ面, 有目, 玉緑なし	10-5
3	I-2	輪丸瓦	S D 35	織文二巴文	—	17.2	12.8	2.1	0.7	0.82	瓦当等: 巴字等, 輪瓦21 ?, 滝桟1mm	10-2
4	I-4	輪丸瓦	カクラン	織文二巴文	—	(17.0)	(12.6)	2.1	0.8	0.30	瓦当等: 巴字等, 輪瓦21 ?, 滝桟1mm	10-4
5	I-5	輪丸瓦	S X 8	織文二巴文	—	(17.0)	(12.4)	2.0	0.8	0.56	瓦当等: 巴字等, 輪瓦(21), 滝桟1mm	10-3
6	I-3	輪丸瓦	S D 34	織文二巴文	—	(19.2)	(14.6)	2.4	0.9	1.00	瓦当等: 巴字等, 輪瓦17, 滝桟1.4cm	10-6
7	I-7	輪丸瓦	S X 8	[不明]	24.9	—	—	2.0	1.0	1.35	凸面: ナデ, コビキ面, 凹面: コビキ面, 有目, 卡緑なし	10-7

第20図 軒丸瓦

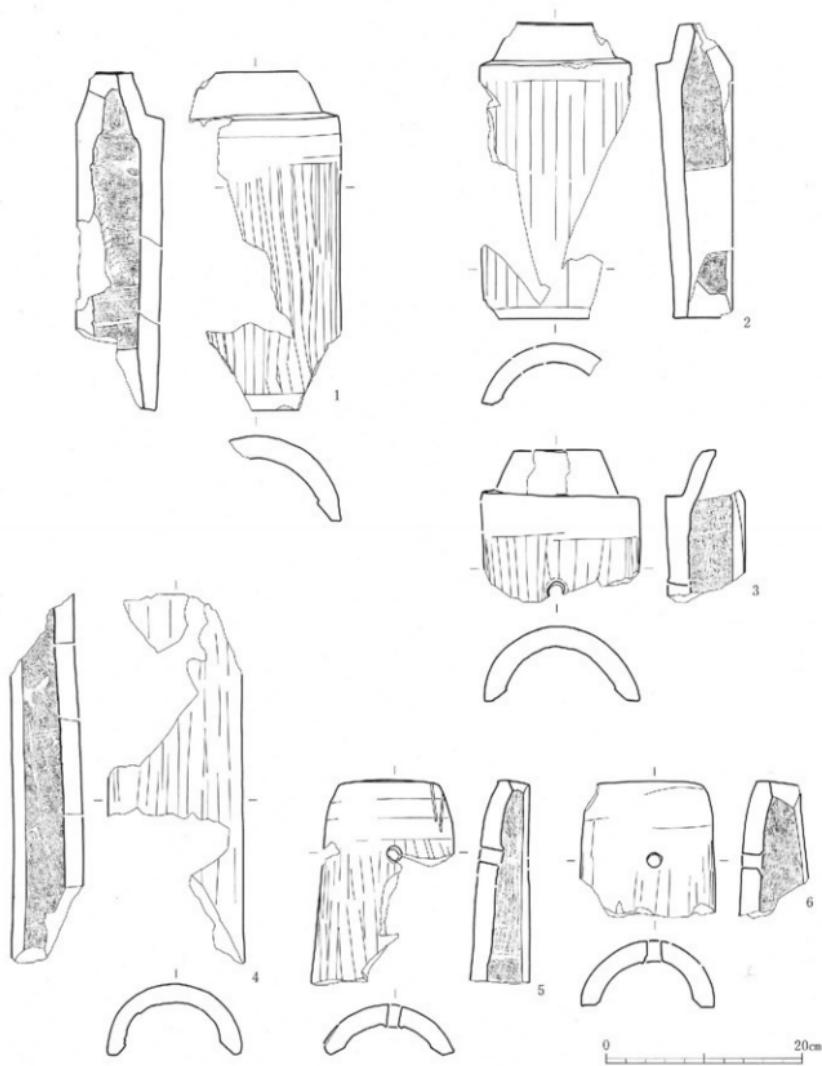
(4) その他の遺物

その他には縄文土器、土師器、須恵器、剥片石器、石製品、金属製品の出土があったが、土器類は全て小破片で、図化できるものはほとんど無い。若林城より適る遺物については下層や周辺に存在する古い時代の造構に伴うものとみられる。鉄釘は13本出土しており、SX 8 やⅢ層中出土の釘に関しては城建物に伴うものである可能性が高い。またⅢ層からは「寛永通宝」が1点出土した。



試査番号	登録番号	種類	地質・断面	幅	高さ	厚さ	内厚	重さ (kg)	参考	写真図版
1	F 8	丸瓦	SX 8	34.5	17.8	2.3	9.6	6.0	2.37	凸面:ナデ、凹面:コビキ痕・布目 [SD34と接合]
2	F 9	丸瓦	SX 8	33.0	17.6	2.8	9.3	5.0	2.98	凸面:ナデ・刻印あり、凹面:コビキ痕・布目・純丸痕
3	F16	丸瓦	SX 8	35.7	17.3	2.4	9.4	4.9	2.36	凸面:ナデ、凹面:コビキ痕・布目・調正痕・砂粒斜実程 [皿算と接合]
4	F17	丸瓦	SX 8	35.3	17.9	2.6	9.3	5.5	2.06	凸面:ナデ、凹面:コビキ痕・布目・調正痕

第21図 丸瓦(1)



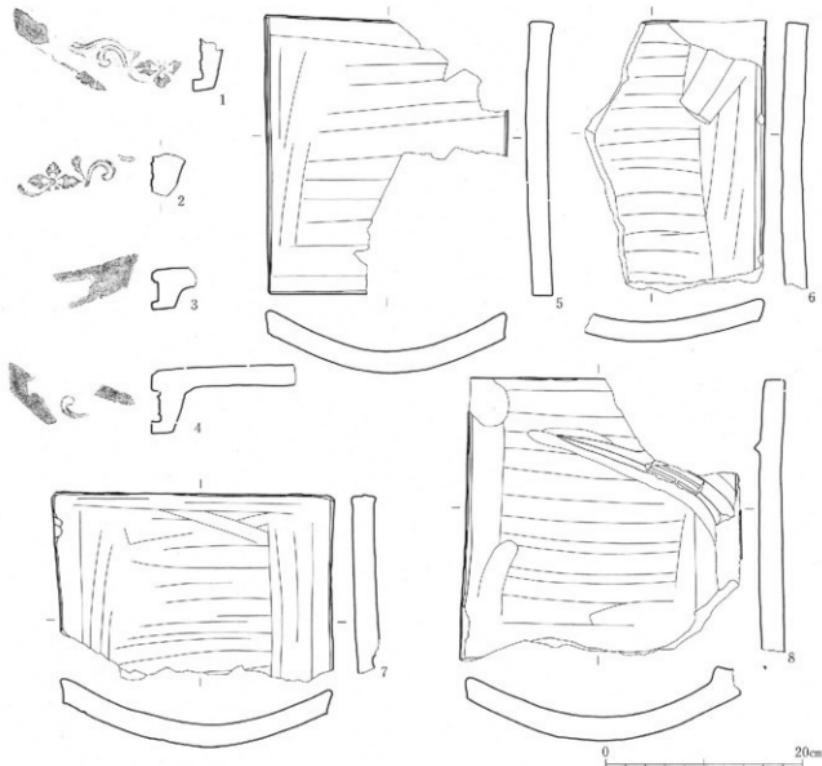
第22図 九瓦(2)

試験番号	登録番号	種類	通称・時代	最大	幅	高さ	重さ	参考文献	
1	F12	丸瓦	SX 8	34.6	(37.5)	2.2	8.9	5.6	1.54 凸面:ナギ、凹面:コビキ唐・春日・御王唐 10-12
2	F14	丸瓦	SX 8	30.2	15.5	2.0	7.8	3.8	1.24 凸面:ナギ、凹面:コビキ唐・春日・御王唐 (直筋と接合) 10-13
3	F15	丸瓦	SX 8	—	16.2	—	8.0	4.4	0.89 凸面:ナギ、凹面:コビキ唐・春日・御穴あり (直筋と接合) 10-14
4	F20	丸瓦	SX 8	38以上	(15.6)	1.9	7.1	—	1.03 凸面:ナギ、凹面:コビキ唐・春日・御状的突起 (足134と接合) 10-15
5	F18	丸瓦	S-D34	—	—	2.0	—	なし	0.79 凸面:ナギ、凹面:コビキ唐・春日・御穴あり (足160と接合) 10-16
6	F19	丸瓦	SX 8	—	—	2.1	—	なし	0.72 凸面:ナギ、凹面:コビキ唐・春日・御穴あり (足155と接合) 10-17



第23図 軒平瓦

国名番号	標識番号	種類	文様・書体	長さ(cm)	断面寸法(cm)			重さ(kg)	備考	写真通版
					幅	高さ	内幅(高)			
1	G 1	軒平瓦	SX 8 三字文+唐草文	—	26.2	4.9	15.7	3.0	1.31 (直壁軸表面と接合)	11-1
2	G 5	軒平瓦	SD34 三字文+唐草文	27.0	—	4.6	15.8	3.1	1.24	11-3
3	G 4	軒平瓦	SX 8 三字文+唐草文	—	—	4.7	16.0	3.4	0.47	11-5
4	G 12	直壁軸出	二三字文+唐草文	—	—	4.7	—	3.5	0.25	11-6
5	G 38	軒平瓦	林桂文+唐草文	—	—	—	(2.8)	0.08		11-7
6	G 10	軒平瓦	SX 8 (不明)+唐草文	—	—	5.1	—	3.2	0.21 林桂文?と直壁軸の唐草文(接合と接合)	11-8
7	G 3	軒平瓦	SX 8 (三字文)+唐草文	28.3	26.2	4.8	15.9	3.0	1.62 小口に筋目あり(直壁軸表面と接合)	11-4
8	G 2	軒平瓦	SD34 三字文+唐草文	—	24.8	4.1	15.9	3.0	0.65 (直壁軸表面と接合)	11-2
9	G 7	軒平瓦	SD34 (不明)+唐草文	33.6	29.0	—	22.3	—	2.95 深水瓦(直壁・直壁軸表面と接合)	11-9



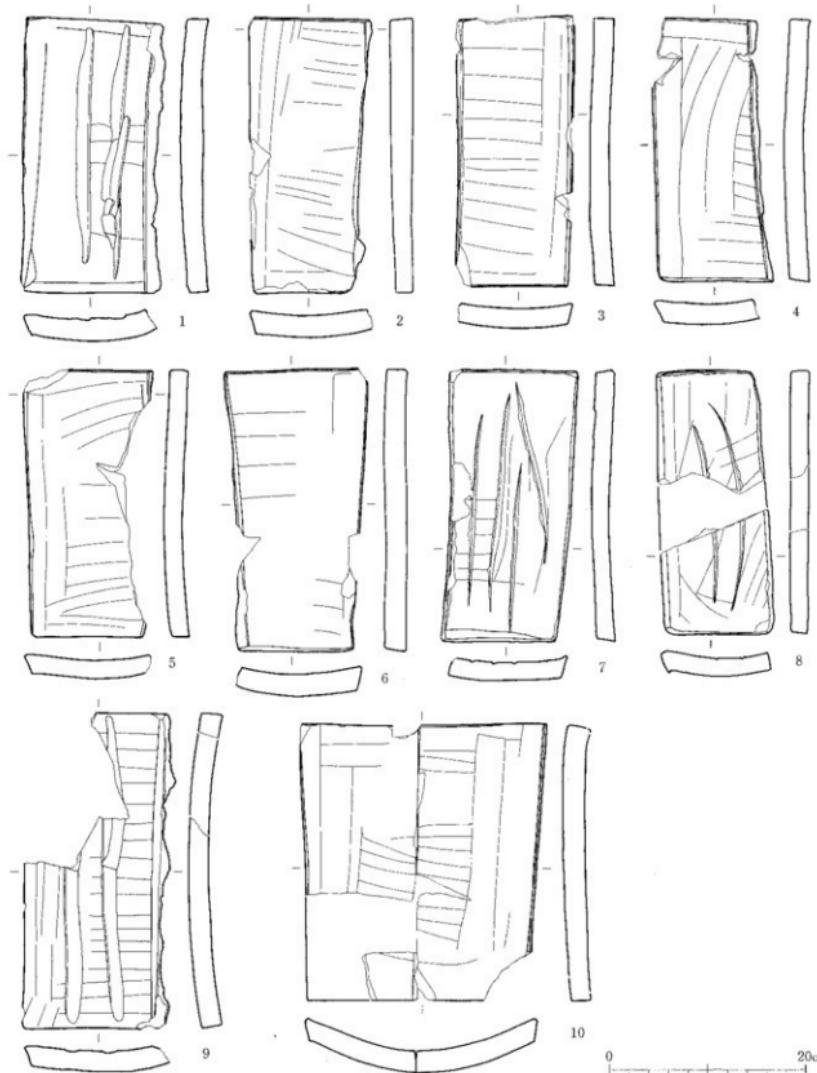
試査番号	柱脚番号	種類	唐脚・脚位	文様	長さ(cm)	幅 高さ 内深さ 外深さ	重さ(kg)	備考	写真図版
1	G37	軒平瓦	SX34	(不明)	—	—	—	0.19	済水瓦
2	G14	平瓦	SD34	花葉文+唐草文+子張	—	—	—	0.06	済水瓦
3	G13	軒平瓦	SX8	(不明)	—	—	—	0.14	済水瓦?
4	G5	軒平瓦	SX8	(不明)	—	—	—	0.71	済水瓦

試査番号	柱脚番号	種類	唐脚・脚位	長さ(cm)	幅 高さ 内深さ 外深さ	重さ(kg)	備考	写真図版
5	G17	平瓦	SX8	26.5	(25.0) (24.0) 2.3	1.71	凸面:ナデ、凹面:ナデ(SD34と接着)	11-15
6	G18	平瓦	SX8	—	—	2.2	凸面:ナデ、凹面:ナデ	11-16
7	G15	平瓦	SD34	—	28.9	(2.4)	1.96	凸面:ナデ、凹面:ナデ・木貫通孔あり
8	G16	平瓦	SD34	—	28.1	(27.2) (2.4)	1.42	凸面:ナデ、凹面:ナデ・木通しの土手あり

第24図 軒平瓦・平瓦

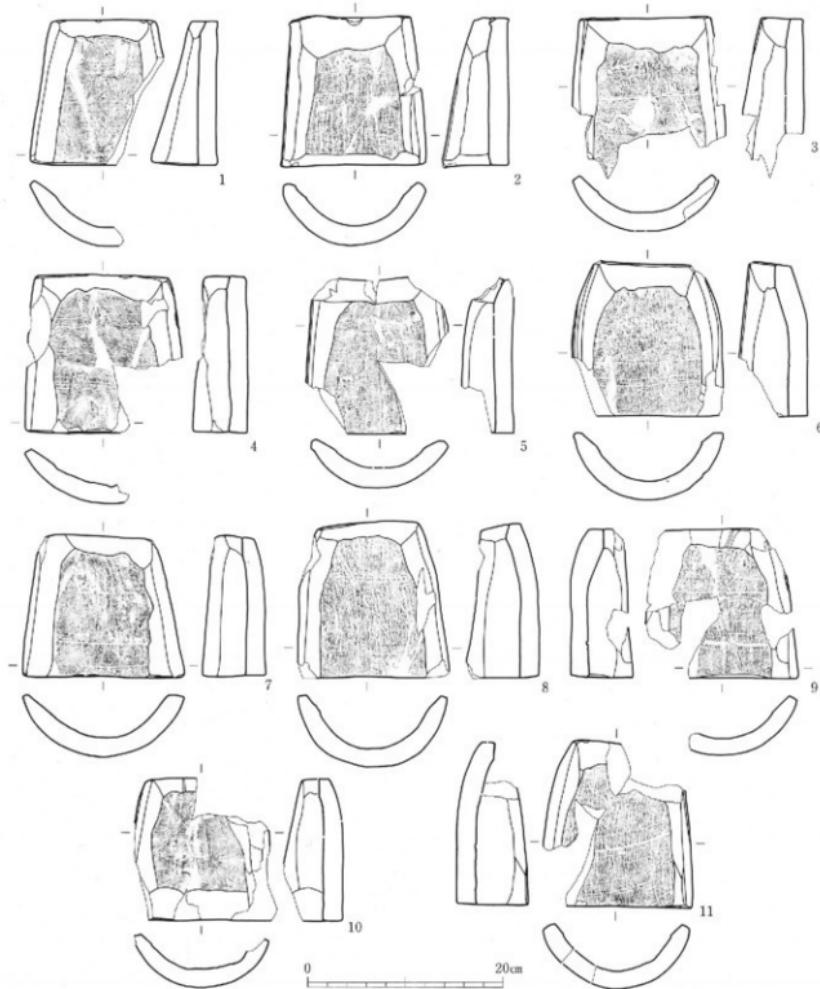
試査番号	柱脚番号	長さ(cm)	唐脚・脚位	側面位置	側面	備考	写真番号
—	G24	平瓦	SX8	小口	○	透10mm	13-15
—	G25	平瓦	SX8	小口	○ ○	透5mm+2つ	13-18
—	G26	平瓦	SX8	小口	○	透5mm	—
—	G27	平瓦	SX8	小口	○	透4.5mm	—
—	G28	平瓦	SX8	小口	(半円彫)	透5mm	13-19
—	G29	平瓦	SX8	小口	(半円)	透5mm	13-17
—	G30	平瓦	SX8	小口	(空)	透4.5mm	13-20
—	G31	平瓦	SX8	小口	(丸みのある円)	透12mm	13-16
—	G32	平瓦	SX8	小口	○	透10mm	—
—	G33	平瓦	SX8	小口	○	透5mm	—
—	G34	平瓦	更期	小口	(半円)	透10mm	—
—	G35	平瓦	SD34	小口	○	透6mm	—
—	G36	平瓦	SD33	小口	○	透5mm	—

第6表 刻印瓦一覧



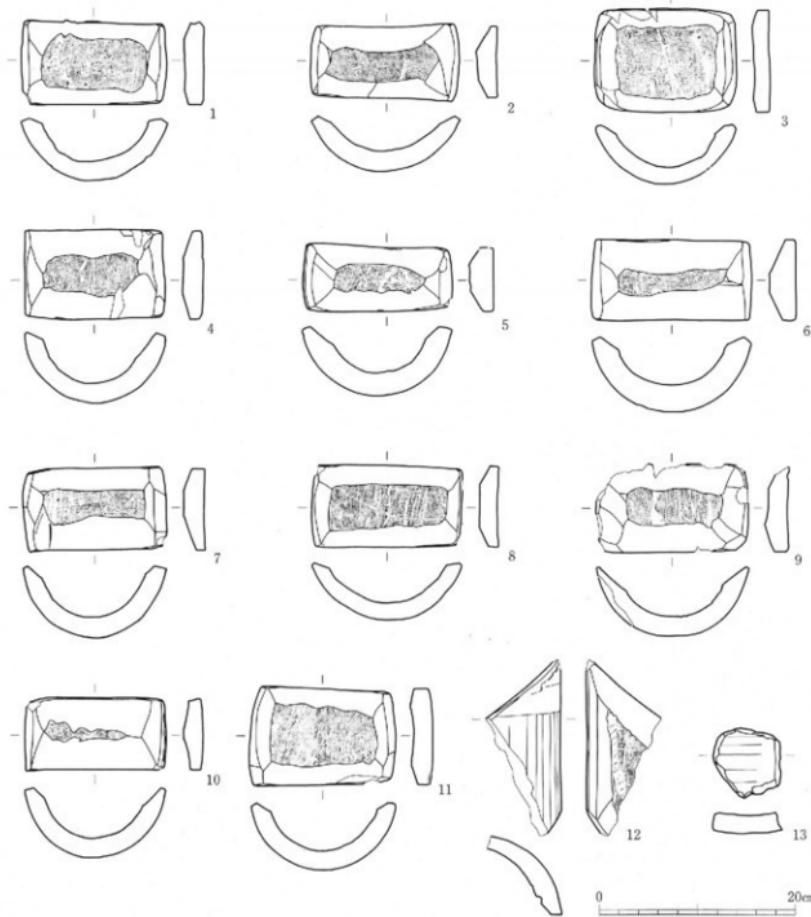
第25図 烧斗瓦

調査番号	番号番号	種類	通称・部位	高さ	幅(単位)	厚さ	重さ(kg)	参考	算出依据		
1	日1	焼斗瓦	SD34	28.1	(13.2)	2.4	1.25	焼成後分離、凸面:ナデ、凹面:ナデ、輪広の剥離2本あり	12-1		
2	日4	焼斗瓦	SX 8	26.2	12.6	16.5	2.4	0.68	焼成後分離、凸面:ナデ、凹面:ナデ	12-2	
3	日5	焼斗瓦	SD34	27.6	12.0	(11.5)	2.0	1.02	焼成後分離、凸面:ナデ、凹面:ナデ	12-3	
4	日6	焼斗瓦	SX 8	26.9	11.6	(16.5)	2.1	0.94	焼成後分離、凸面:ナデ、凹面:ナデ	12-4	
5	日7	焼斗瓦	SX 8	27.3	(13.2)	11.4	1.9	0.86	焼成後分離、凸面:ナデ、凹面:ナデ	12-5	
6	日9	焼斗瓦	SX 8	28.7	14.8	12.0	2.2	1.19	焼成後分離、凸面:ナデ、凹面:ナデ (SD34と接合)	12-6	
7	日2	焼斗瓦	SX 8	27.8	13.1	11.6	2.0	1.13	焼成前分離+側面ズリ、凸面:ナデ、凹面:ナデ、凹面:ナデ、剥離4本あり (SD34と接合)	12-7	
8	日8	焼斗瓦	SD34	(27.0)	(13.2)	—	1.9	0.72	焼成前分離+側面ズリ、凹面:ナデ、凹面:ナデ、剥離2本あり	12-8	
9	日10	焼斗瓦	SX 8	32.2	—	14.6	2.1	1.12	焼成後分離+輪広の分離面、凸面:ナデ、凹面:ナデ、凹面:ナデ、輪広の剥離2本あり	12-10	
10	日3	焼斗瓦	SD34	SX 8	28.1	22.7	—	2.3	2.15	焼成後分離、凸面:ナデ、凹面:ナデ	12-9



標本番号	登錄番号	種類	位置	体 長 (mm)			重さ (g)	備考	写真番号
				前足	中足	後足			
1	H16	輪遠い*	SD34	14.6	(14.0)	10.6	0.7	凸面:ナデ、凹面:コビキ頭・布目	12-11
2	H12	輪遠い*	SX8	15.7	14.8	12.4	6.8	0.71 凸面:ナデ、凹面:コビキ頭・布目 (質厚・SD34と接合)	12-12
3	H13	輪遠い*	SX8	-	-	13.4	-	0.49 凸面:ナデ、凹面:コビキ頭・布目	12-13
4	H17	輪遠い*	SD34	16.0	(16.0)	13.5	5.6	0.64 凸面:ナデ、凹面:コビキ頭・布目 (質厚と接合)	12-14
5	H19	輪遠い*	SX8	15.9	-	-	(6.5)	0.59 凸面:ナデ、凹面:コビキ頭・布目	12-15
6	H11	輪遠い*	SX8	15.8	(15.3)	10.2	7.4	0.80 凸面:ナデ、凹面:コビキ頭・布目	12-16
7	H14	輪遠い*	SD34	14.2	16.4	11.3	6.5	0.74 凸面:ナデ、凹面:コビキ頭・布目	12-17
8	H15	輪遠い*	SX8	16.0	(15.5)	10.5	7.5	0.85 凸面:ナデ、凹面:コビキ頭・布目 (質厚と接合)	12-18
9	H18	輪遠い*	SX8	15.2	(15.3)	(11.9)	6.2	0.60 凸面:ナデ、凹面:コビキ頭・布目 (SD34と接合)	12-19
10	H20	輪遠い*	SX8	15.6	-	-	6.9	0.51 凸面:ナデ、凹面:コビキ頭・布目	12-20
11	H21	輪遠い*	SD34	16.9	(15.3)	-	7.3	0.64 凸面:ナデ、凹面:コビキ頭・布目 (小骨群8-4と接合)	13-1

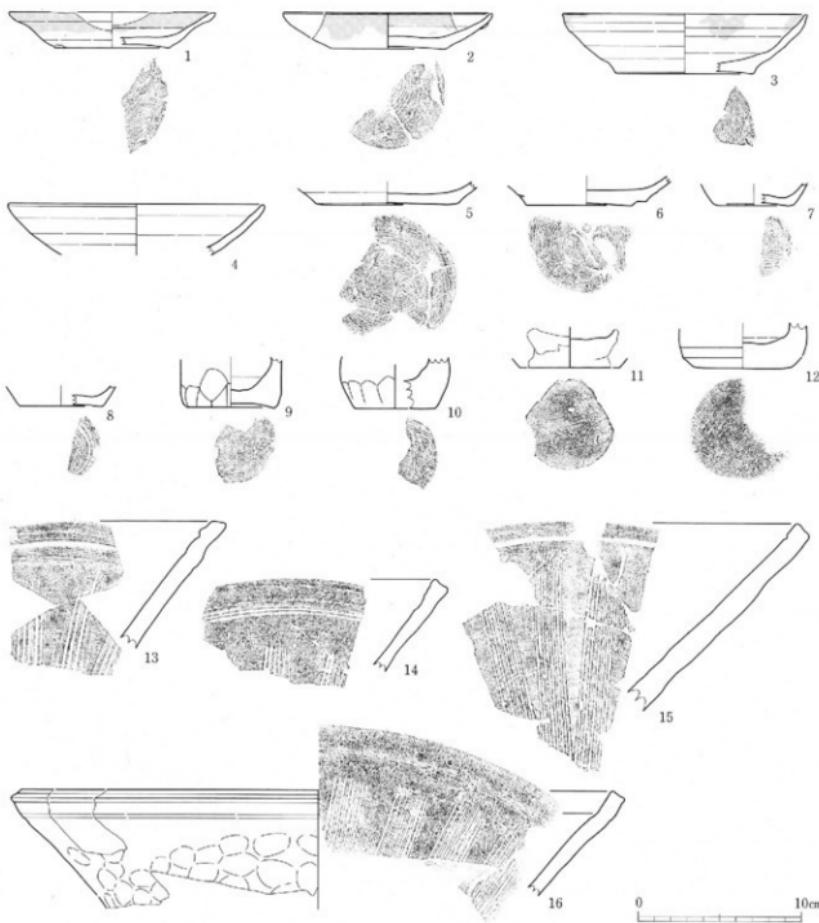
第26図 輪遠い



図版番号	登錄番号	種類	測量・場所	度量 (mm)				重さ (g)	備考	写真図版
				最大幅	最小幅	最大長	最小長			
1	H22	面戸瓦	SD34	8.5	14.8	2.0	6.3	0.42	凸面:ナゲ、凹面:コビオ唐・毒日	13-2
2	H23	面戸瓦	SD34	7.9	15.2	2.1	5.7	0.37	凸面:ナゲ、凹面:ケヅリ	13-3
3	H24	面戸瓦	SD34	16.5	14.4	1.7	6.0	0.51	凸面:ナゲ、凹面:コビオ銀・毒日(並肩と後合)	13-4
4	H25	面戸瓦	SD34	9.1	14.2	2.0	7.2	0.47	凸面:ナゲ、凹面:布目	13-5
5	H26	面戸瓦	SD34	6.9	15.3	2.3	7.0	0.38	凸面:ナゲ、凹面:左目	13-6
6	H27	面戸瓦	SD33	8.3	16.3	2.7	7.6	0.54	凸面:ナゲ、凹面:左目	13-7
7	H28	面戸瓦	SX 8	8.3	14.5	2.1	7.3	0.43	凸面:コビオ唐・毒日(SD34と後合)	13-8
8	H30	面戸瓦	SD34	8.3	15.3	1.7	6.8	0.34	凸面:ナゲ、凹面:コビオ銀・毒日(並肩と後合)	13-9
9	H31	面戸瓦	SX 8	9.0	15.5	2.0	7.0	0.49	凸面:ナゲ、凹面:布目(並肩と後合)	13-10
10	H29	面戸瓦	SD34	7.3	14.4	2.0	7.1	0.34	凸面:ナゲ、凹面:布目	13-11
11	H32	面戸瓦	SX 8	10.1	16.9	2.1	6.8	0.54	凸面:ナゲ、凹面:コビオ唐・毒日	13-12

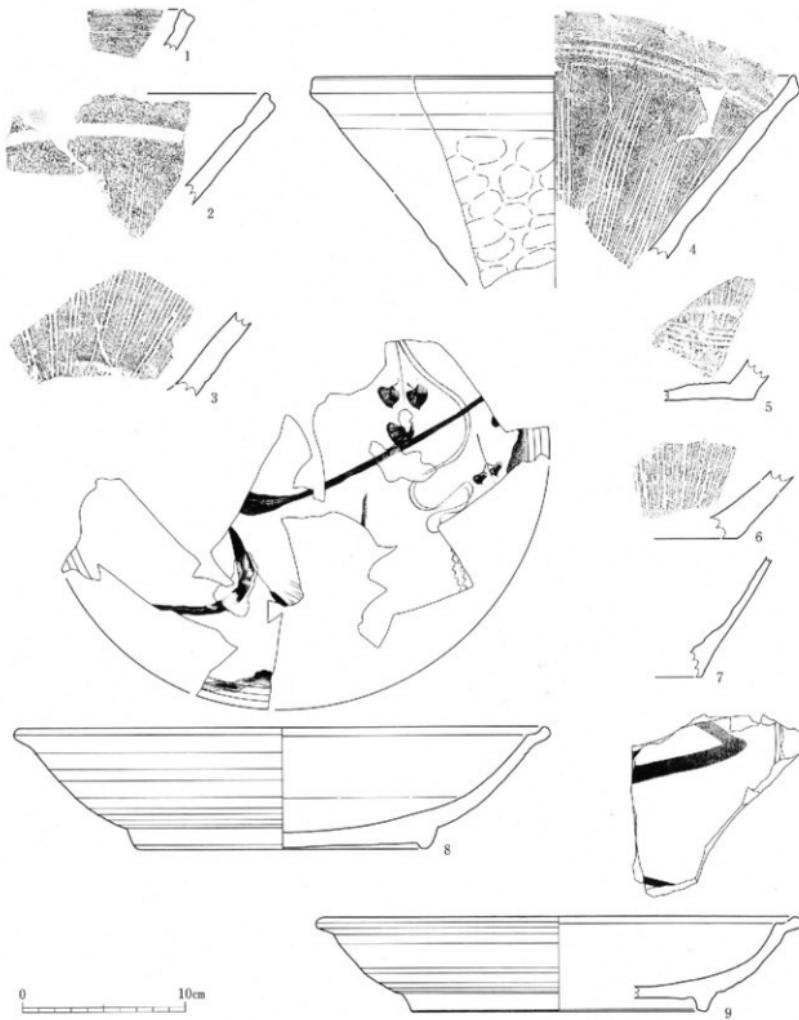
図版番号	登録番号	種類	測量・場所	度量 (mm)				重さ (g)	備考	写真図版
				最大幅	最小幅	最大長	最小長			
12	H34	(H33.23)	SX 8	—	—	2.2	0.34	凸面:ナゲ、凹面:コビオ銀・布目・桃尻板、背鰭凹側 (約26°)	13-13	
13	H35	(小形)	SX 8	7.2	6.8	1.9	0.12	凸面:ナゲ、凹面:ナゲ、内臓状に膨張し、側の腹口に瘤頭あり	13-14	

第27図 面戸瓦ほか



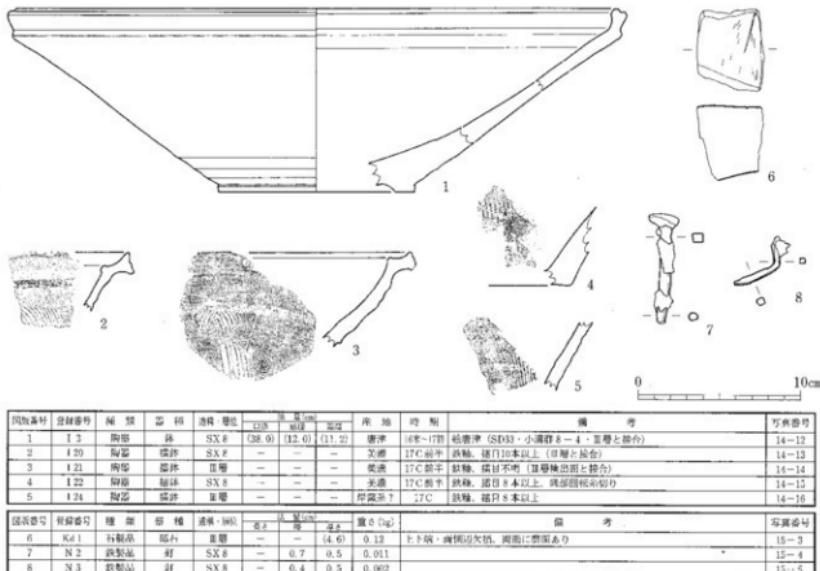
回数番号	付録番号	種類	器種	遺跡・場所	目次	形	大きさ	產地	時期	参考	写真番號
1	X 1	土師質土器	粗目焼	SX 8	(13.6)	(7.0)	2.2	在地	17C 初め	ヨクヨク調査、瓶部赤切り、外面部下端に擦付着	13-22
2	X 7	土師質土器	粗目焼	SX 8	(12.8)	(7.0)	2.2	在地	17C 初め	ヨクヨク調査、瓶部赤切り、内外面部下端に擦付着	13-23
3	X 9	土師質土器	粗目焼	SX 8	(15.0)	(8.4)	3.7	在地	17C 初め	ヨクヨク調査、瓶部赤切り、内外面部下端に擦付着、底部中央に擦り痕	13-24
4	X 5	土師質土器	粗目焼	SQ38	(15.8)	-	-	在地	17C 初め	ヨクヨク調査	13-25
5	X 4	土師質土器	粗目焼	SQ38	-	(8.8)	-	在地	17C 初め	ヨクヨク調査、瓶部赤切り	13-26
6	X 6	土師質土器	粗目焼	SQ34	-	2.3	-	在地	17C 初め	ヨクヨク調査、瓶部赤切り	13-27
7	X 14	土師質土器	小切頭	SQ34	-	(4.9)	-	在地	17C 初め	ヨクヨク調査、瓶部赤切り	13-28
8	X 16	土師質土器	小切頭	SQ34	-	(5.1)	-	在地	17C 初め	ヨクヨク調査、瓶部赤切り	13-29
9	X 17	土師質土器	直輪	SQ34	-	(5.2)	-	在地	17C 初め	ヨクヨク調査、瓶部赤切り	13-30
10	X 19	土師質土器	残底面	SQ33	-	(5.0)	-	在地	17C 初め	ヨクヨク調査、瓶部赤切り、外面部下端に擦付のケズリ	13-31
11	X 18	土師質土器	残輪	-	(5.0)	-	-	在地	17C 初め	ヨクヨク調査、瓶部赤切り、外面部下端に擦付のケズリ、底部赤切り	13-32
12	X 20	土師質土器	残底面	SX 8	-	6.0	-	在地	17C 初め	ヨクヨク調査、瓶部赤切り+ナメ、外面部下端に擦付のケズリ	13-33
13	1.17	脚器	繩跡	SX 8	-	-	-	丹波	17C 前半	無輪無施釉、底目 5 本 (16mm)、片口 (SQ33) と適合	14-1
14	1.6	脚器	繩跡	SX 8	-	-	-	丹波	17C 前半	無輪無施釉、底目 7 本 (19mm)、1.10 と同體? (直輪と適合)	14-2
15	1.8	脚器	繩跡	SX 8	-	-	-	丹波	17C 前半	無輪無施釉、底目 5 本 (17mm)、1.12 と同體? (直輪と底面と接合)	14-3
16	1.7	脚器	繩跡	SX 8	(37.6)	-	-	丹波	17C 前半	無輪無施釉、底目 7 本 (19mm) (第 4 次測量 3 T - SQ31) と接合)	14-4

第28図 土師質土器・陶器



图版番号	器物番号	種類	形體	邊縁・身部	口径	底径	高さ	产地	時期	備考	写真番号
1	115	陶器	縦縫	直縁	—	—	—	丹波	17C前半	無縫燒成跡、縫目不明	14-4
2	111	陶器	縦縫	小縫口-1	—	—	—	丹波	17C前半	無縫燒成跡、縫目8本(24mm) (重縫と縫合)	14-6
3	110	陶器	縦縫	SX 8	—	—	—	丹波	17C前半	無縫燒成跡、縫目7本(19mm)、T9上同縫口? (第4次調査と接合)	14-8
4	115	陶器	縦縫	SX 8	(30.0)	—	—	丹波	17C前半	無縫燒成跡、縫目8本(24mm) (小縫口と-2・直縫と縫合)	14-7
5	119	陶器	縦縫	SX 8	—	—	—	丹波	17C前半	無縫燒成跡、縫目不明	14-9
6	112	陶器	縦縫	SX 8	—	—	—	丹波	17C前半	無縫燒成跡、縫目5本(17mm)、T9と同縫口? (直縫と縫合)	14-10
7	14	陶器	縦縫	—	—	—	—	中国	18-19世紀	和陶豆 (縫口次第に直縫と縫合)	14-11
8	11	陶器	大平縫	SD33	(22.8)	(17.8)	(7.4)	曉原	17C前半	無縫燒成し、鉢底・身部 (小縫口8-3と縫合)	15-1
9	12	陶器	大平縫	SX 8	(29.8)	(18.0)	(5.6)	曉原	17C前半	無縫焼成し、鉢底・身部 (草支) (SD03-34と縫合)	15-2

第29図 陶器



第30図 陶器はか

遺物、基本名	瓦										合計	高文土器	土師器	土師瓦器	上野櫛 小片等	洗浄器	陶器	軽石	別所	石製品	土製品		
	軒丸瓦	丸瓦	半丸瓦	平瓦	割斗瓦	縫繩瓦	山口瓦	横切瓦	粘土瓦	その他													
SK217											0				1		1						
SK222											0				1		6						
SD33											0				3		2						
SD33	1	8	3	90	111		5	1	122		1	19	1	18			25						
	820	915	102	6200	3022		970	635	11867														
SD34	4	61	35	450	64	15	32	9	650		6	7	29		4	1							
	1985	5776	5990	44602	14900	2520	5585	1400	81547														
SD35											0				1		2						
小瀬群8~2											0				1		6			1			
小瀬群8~3											7						5		3				
小瀬群8~4											60												
小瀬群8~5											51												
小瀬群8~6											1091												
小瀬群8~7											5												
小瀬群8~8											255												
小瀬群8~9											85												
小瀬群8~10											348												
小瀬群8~11											0												
小瀬群8~12											9												
SX8	33	254	20	1031	142	20	22	2	14	1	1541				10	4	8	39	1	31		2	2
	5270	4070	4942	96210	30175	4590	3280	349	2460	120	116492												
I型		50	6	1000	—						0					0				3			
	4	23	8	75	6	4					456												
皿型燒造曲面	165	1635	815	2732	309	470					6117	2	12	2	1	99		19	6	2			2
皿型	9	130	10	529	75	3	35	1			722												
	267	6340	620	27999	2609	—	1005	209			39651	2	45	14	11	281	1	49	6	2	1	8	
JT上	3	19	1								23												
	365		1620	49							2025												
カクラン	3	11	1	46	3	1	1				66												
	306	660	31	3508	1059	—	105				5761	4	1		28					2			1
小瀬		1	5	3							9												
	—	1080	1150								2230												
合計	54	492	70	2291	255	49	81	4	24	1	3326	4	97	47	22	525	2	148	16	4	1	14	

※ 瓦の上段は点数、下段は重量(g)

第7表 出土遺物集計表

5 まとめ

[礎石建物跡について]

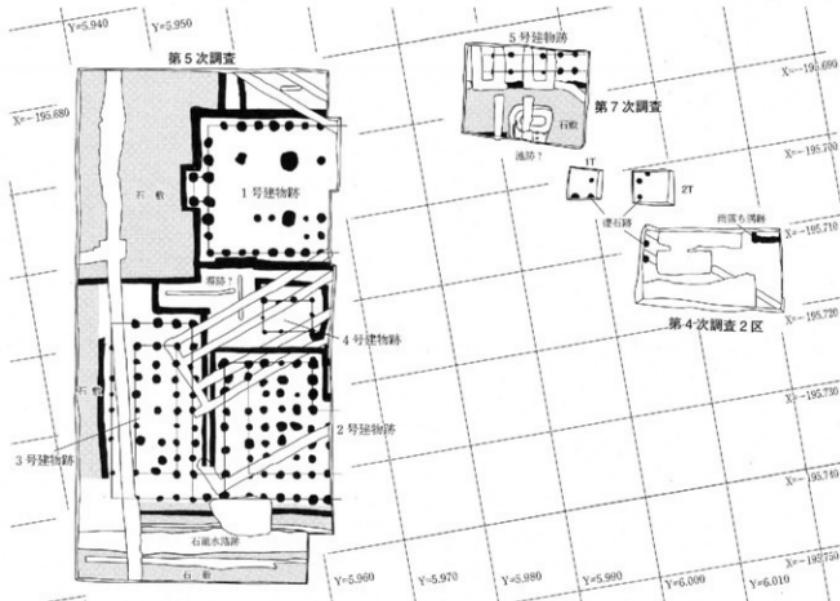
今回の調査区は大型の礎石建物跡を複数発見した第5次調査区の北東側に位置し、これらと関連する遺構の発見が予想された地区である。中でも1号建物跡は仙台城二の丸へ移築された「台所」と考えられ、その東側への延びが注目されていた。5号建物跡は東西が5間以上あることから、一定の規模を有する建物とみられる。しかし礎石跡は2・3号建物と比較しても小型で、雨落ち溝内に敷石と玉石敷きも確認できなかった。この点については5号建物の規模が小さく、構造も簡易だったと考えられると共に、あるいは残存状況に起因していることも十分考えられる事から判断は難しく、今後の調査に委ねる点が多い。

これとは別にSD36により新たな建物が南側に展開した場合、この建物は「台所」の真東に位置することとなり、推定される北辺柱列は、1号建物北辺列より1間南側の並びと同じとなる可能性がある。また「台所」が「御二之丸御指図」に描かれた東西12間規模とした場合、SD36の東端から1号建物東辺までの距離は15m程度となり、想定される建物の東西規模は最大で5間程度とみられる。

さらに第4次調査の2区や第1・2試掘区においても小型の礎石跡が複数検出されている。礎石跡の柱間は概ね6尺5寸で、配置状況からそこには複数の礎石建物の存在が推定されると共に、それらは今回発見した5号建物跡をはじめ、第5次調査での建物群とも密接な配置関係をとっているものと考えられる。

[石敷遺構と性格不明遺構について]

1~3号建物跡の西および南側には石敷きが広範囲に広がるのが確認されており、これらは城の大手口に面する表の空間の施設であったとみられている。これに対し6・7号石敷遺構は1号建物や5号建物、さらに南側に予想される建物に囲まれた地区に位置している。この地区は同じ表側に位置しながらも、周囲から見通す事のできない、



第31図 第4・5・7次調査で発見した若林城の遺構

いわば中庭的な空間とみられ、ここに城内における建物を取巻く石敷きのあり方をうかがう事ができる。

そのような場所に造られた S X 8 は規模や石積みの構造に加え、周囲の石敷きとは異なった石敷きを伴うことなどから、表側に配置された小規模な池と考えるのが適当といえる。池の底面に粘土や漆喰を貼った痕跡や取付く水路などは確認できなかったが、石積み中央のくぼみに水を湛え、時には周囲の石積み部分も水に浸っていたものと考えられる。また石列により仕切られた石敷きは、南側から池への通路的なアプローチ部分とみられる。しかしこの池にも建物解体の際に不要となった瓦が廃棄されることとなる。これらの遺構の南隣には近く新たな施設の建設が予定されており、今後の確認調査により、建物以外の諸々の施設の発見が期待される。

【近世の溝跡と畑跡について】

小溝状遺構群の可能性もある S D35・37 を除いた S D33・34 は、底面に円縫を敷いた溝跡である。堆積土中には瓦片が混入し、特に S D33 の南北溝には底面近くより多量の出土があった。この様な瓦の出土状況から、当初これらの溝跡は建物の雨落ち溝の可能性を考えられたが、他遺構との重複から魔城後のものと判断するに至った。しかし本来の構造が明らかでないため不明な点が多く、底面に円縫を敷き並べた造りは、これまで確認した建物に伴う雨落ち溝とも異なり、魔城後に營まれた何らかの施設の一端である可能性が高い。

小溝状遺構群は今回検出した遺構の中では最も新しく、ほとんどが東西方向である事から、その方向に歛を立てるなどして何かしらの栽培を行っていたと考えられる。また各溝間は第 5 次調査での 1 群同様にほぼ 2 m 前後で一定しており、そこには当地での耕作にあたっては強い規格性や規制が働いていることが感じられる。しかしながら畑の土壤や底面の痕跡のみから作物や耕作の頻度・期間を知る事は難しく、今後は石敷きの溝跡をはじめ、絵図などの記録にはない「御菜園」に關注した施設に留意しながらの調査が必要とされる。

【出土瓦について】

若林城跡でこれまで出土した瓦の文様は軒丸の巴文と軒平の三葉文・枯梗文のみである。仙台城跡ではこれまで数多くの軒瓦が出土しており、三の丸跡の調査では巴文は 17 世紀初頭の遺構からのみ出土するとしている(註 2)。また二の丸地区では巴文系から三引両文や九曜文などの家紋系への転換は二の丸の造営が関係しているとし、軒平瓦は細枯梗や劍形枯梗を最も古く位置付けしている(註 3)。これらのことから、若林城においても主体となる軒丸文様は巴文であり、軒平瓦では枯梗文と三葉文であった可能性がある。さらに若林城での滴水瓦の出土数は多く、その形態・文様は 17 世紀中頃とみられる人沢窯跡出土の花菱文や菊花文とは異なり、端巖寺で創建当初に使用されたとみられるものと同意匠である。したがって現在確認できる若林城の瓦は軒瓦に限らず造営から廃城に至る寛永年間に使用されたもので、使用された文様は限られたものであったと考えられる。しかし仙台城ではわずかである三葉文が多く出土する事実について、それを若林城特有の傾向と捉えるのか、また家紋系瓦が本当に存在しないのかなど問題点が残る。加えて若林城の瓦は移築された建物と共に仙台城二の丸で使用されたものも多いと考えられることから、ここから出土する瓦のみでの検討に限界があることも否定できない。

今回の調査では軒瓦以外にも多くの瓦の出土があった。これらは珠文の異なる軒丸瓦や、軒平瓦と滴水瓦の違いをはじめ、丸瓦、半瓦、熨斗瓦においても各々の特徴以外に、法量により二つに分類できる可能性がある。一般的にこの時期の御殿建物の中で門や櫓以外に瓦が使用される建物は限定される。そのような中、これまでの調査で最も可能性が高いのは「台所」と考えられる 1 号建物跡であるが、この瓦の違いが建物内での葺き場所の違いによるものか、あるいは付近に瓦を使用した別の建物が存在しているかは、今後の調査により明らかになっていくものと思われる。

(註 1) 東北大学埋蔵文化財調査研究センター『東北大学埋蔵文化財調査年報 9』1998

(註 2) 仙台市教育委員会『仙台城三ノ丸跡』仙台市文化財調査報告書第 76 集 1985

(註 3) 註 1 に同じ。

参考・引用文献

- 坪井利弘 「古建築の屋根瓦」 理工学社 1981
- 仙台市教育委員会 「仙台城三ノ丸跡」 仙台市文化財調査報告書第76集 1985
- 仙台市教育委員会 「若林城跡」『年報6』 仙台市文化財調査報告書第83集 1985
- 仙台市教育委員会 「若林城跡 第2次発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第90集 1986
- 宮城県教育委員会 「観沢・大沢空跡ほか」 宮城県文化財調査報告書第116集 1987
- 平凡社 「宮城県の地名」 日本歴史地理大系4 1987
- 坪井利弘 「日本の屋根瓦」 理工学社 1992
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 「仙台城二の丸跡」「東北大学埋蔵文化財調査年報7」 1994
- 仙台市教育委員会 「養種園遺跡」 仙台市文化財調査報告書第214集 1997
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 「仙台城二の丸跡」「東北大学埋蔵文化財調査年報9」 1998
- 九州近世陶磁学会 「九州陶磁の編年」 2000
- 仙台市史編さん委員会 「仙台市史」「通史編3 近世1」 2001
- 江戸遺跡研究会編 「図説江戸考古学研究事典」 柏書房 2001
- 仙台市教育委員会 「若林城跡 第3次発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第256集 2002
- 仙台市教育委員会 「仙台城跡1」 仙台市文化財調査報告書第259集 2002
- 至文堂 「日本の美術2」「第429号 発掘された庭園」 2002
- 仙台市教育委員会 「仙台城跡2」 仙台市文化財調査報告書第264集 2003
- 仙台市教育委員会 「仙台城跡3」 仙台市文化財調査報告書第270集 2004
- 仙台市教育委員会 「若林城跡 第4次発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第292集 2005
- 仙台市教育委員会 「仙台城跡5」 仙台市文化財調査報告書第285集 2005
- 仙台市史編さん委員会 「仙台市史」「特別編7 城壁」 2006
- 佐藤 浩 「仙台市若林城跡の実像」「日本歴史 第706号」 日本歴史学会・吉川弘文館 2007



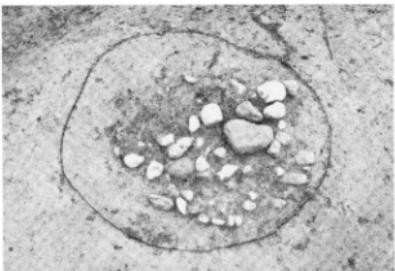
1. IV層面 遺構検出状況（東から）



2. SB 5 磚石建物跡（南東から）



1. SB 5 碓石跡 1 検出状況（南から）



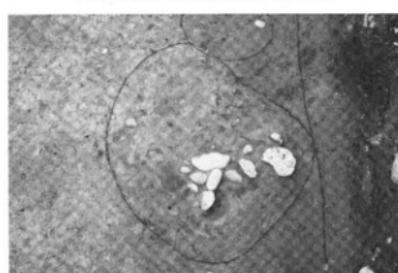
2. SB 5 碓石跡 2 検出状況（南西から）



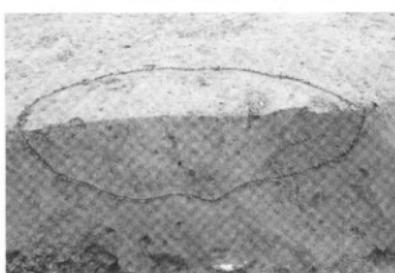
3. SB 5 碓石跡 3 検出状況（西から）



4. SB 5 碓石跡 4 検出状況（東から）



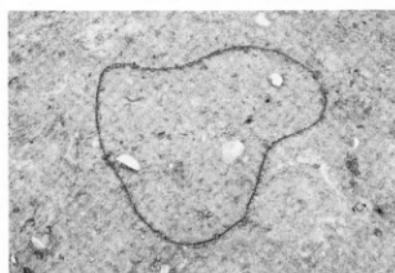
5. SB 5 碓石跡 5 検出状況（東から）



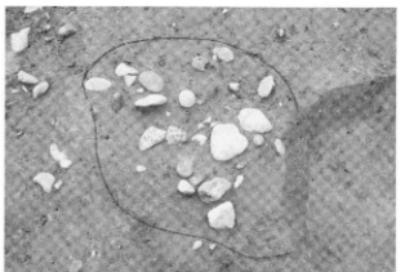
6. SB 5 碗石跡 6 検出状況（東から）



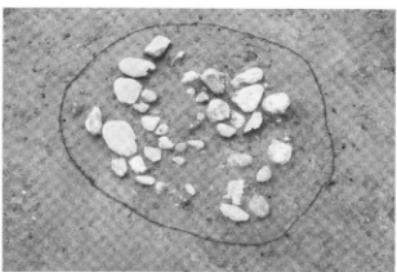
7. SB 5 碗石跡 7 検出状況（南から）



8. SB 5 碗石跡 8 検出状況（東から）



1. SB 5 磚石跡 9 検出状況（東から）



2. SB 5 磚石跡10検出状況（東から）



3. P 1・2 検出状況（南東から）



4. SD32（雨落ち溝跡）（北西から）



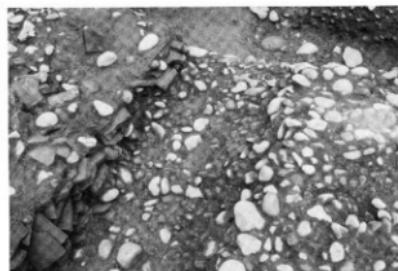
5. SX 8 性格不明遺構全景（北東から）



1. SX 8 瓦出土状況（北から）



2. SX 8 石積み部掘込み状況（北東から）



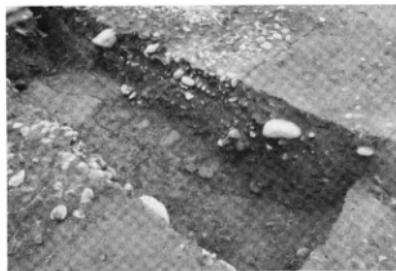
3. SX 8 石積み部底面状況（東から）



4. SX 8 石敷き部・石列（東から）



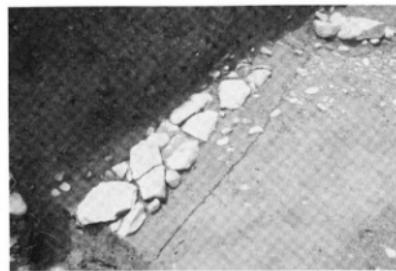
5. SX 8 石敷き部・南北石列（東から）



6. SX 8 断面状況（北東から）



7. 調査風景



8. SD36 雨落ち溝跡底面敷石（東から）



1. 6号石敷遺構（北から）



2. 7号石敷遺構（北東から）



3. SD33 東西部（南から）



4. SD33 南北部 遺物出土状況（南西から）



5. SD33 南北部 底面石敷き（北から）



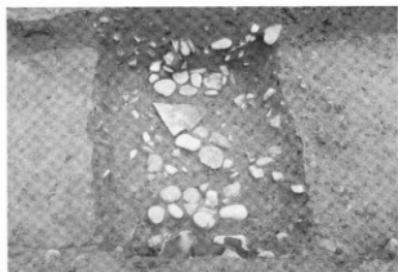
6. SD33 南北部 底面瓦検出状況（南西から）



7. SD34 検出状況（北西から）



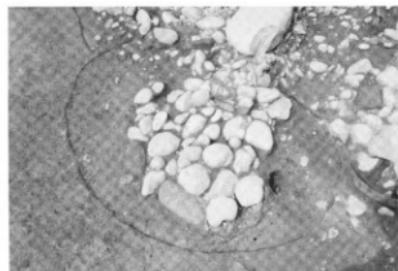
8. SD34 断面状況（東から）



1. SD34 底面石敷き（東から）



2. SD34 挖込み状況（西から）



3. SK223 検出状況（東から）



4. SD38・39 検出状況（北東から）



5. 南壁基本層断面状況（北西から）



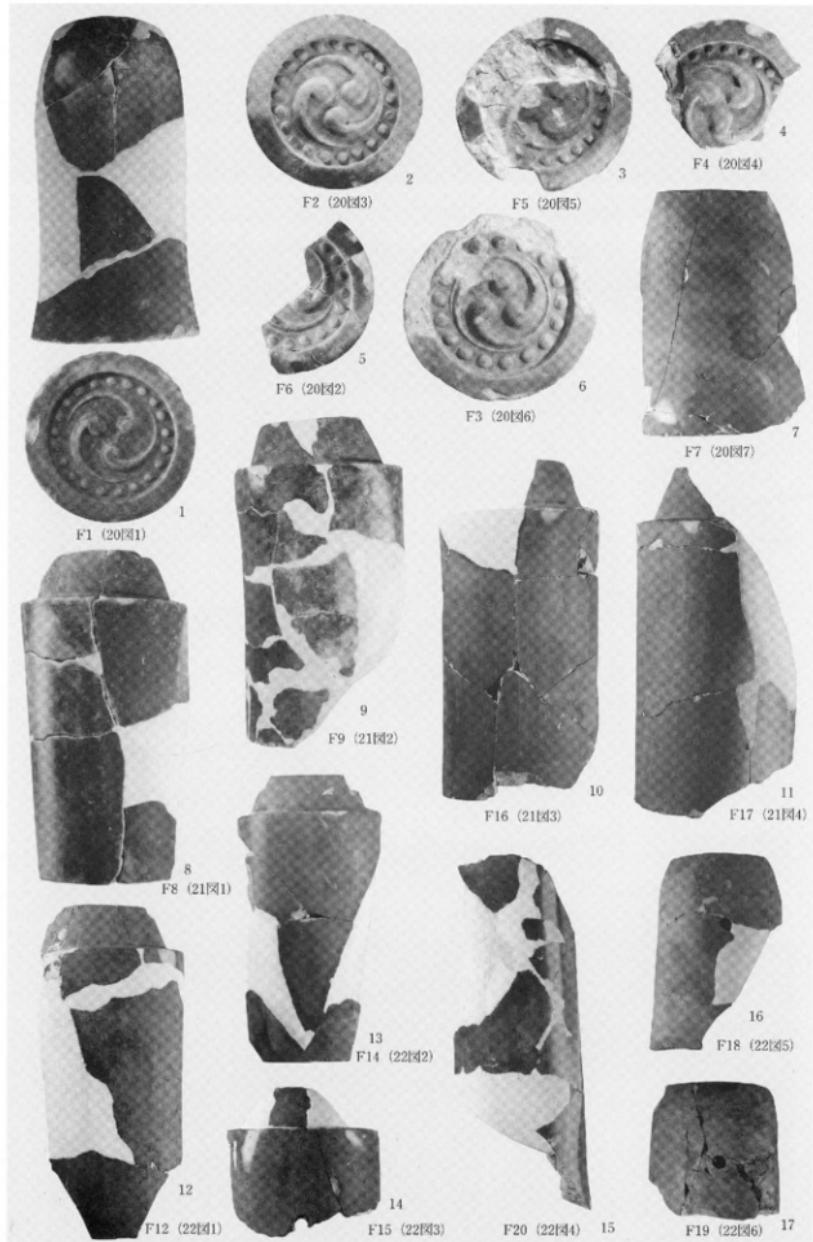
6. 北西部整地層（IV層）状況（東から）



7. 北中部整地層（IV層）状況（南東から）

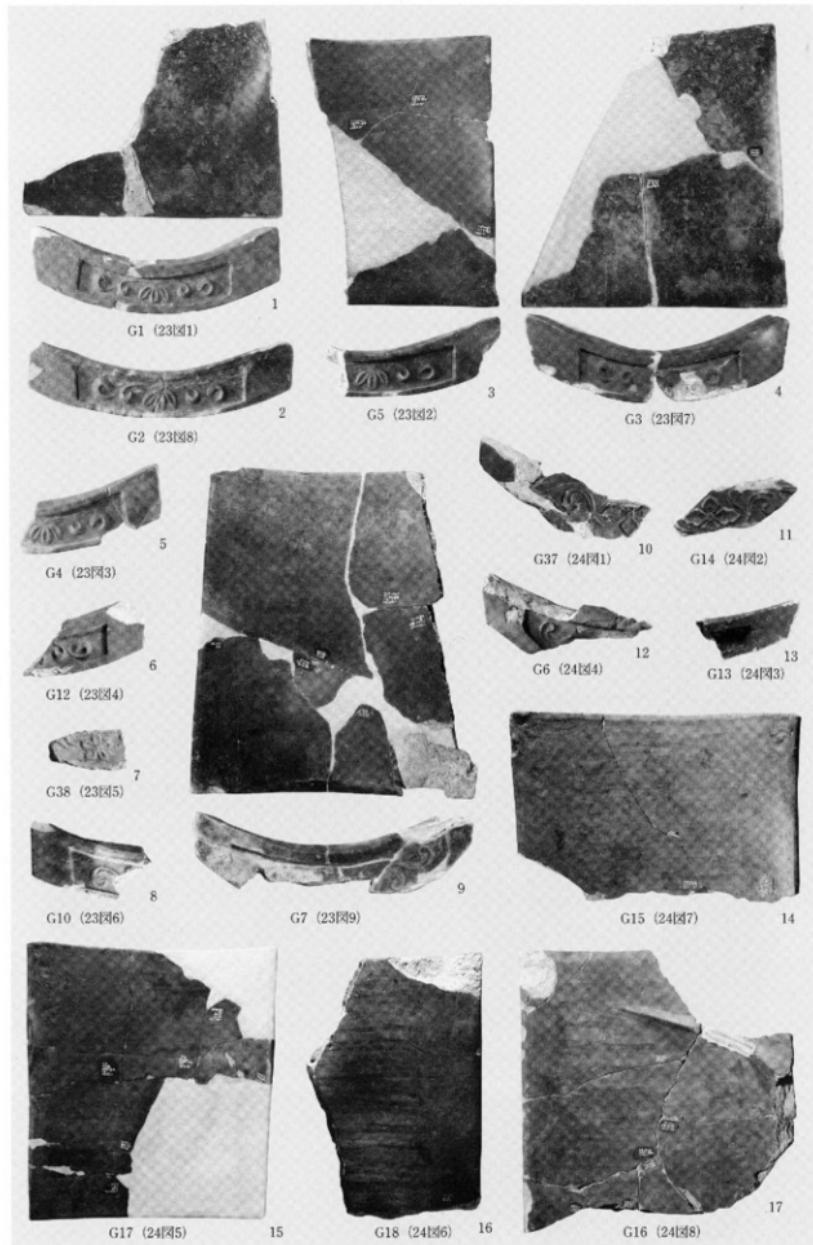


8. 遺構掘込み状況（東から）



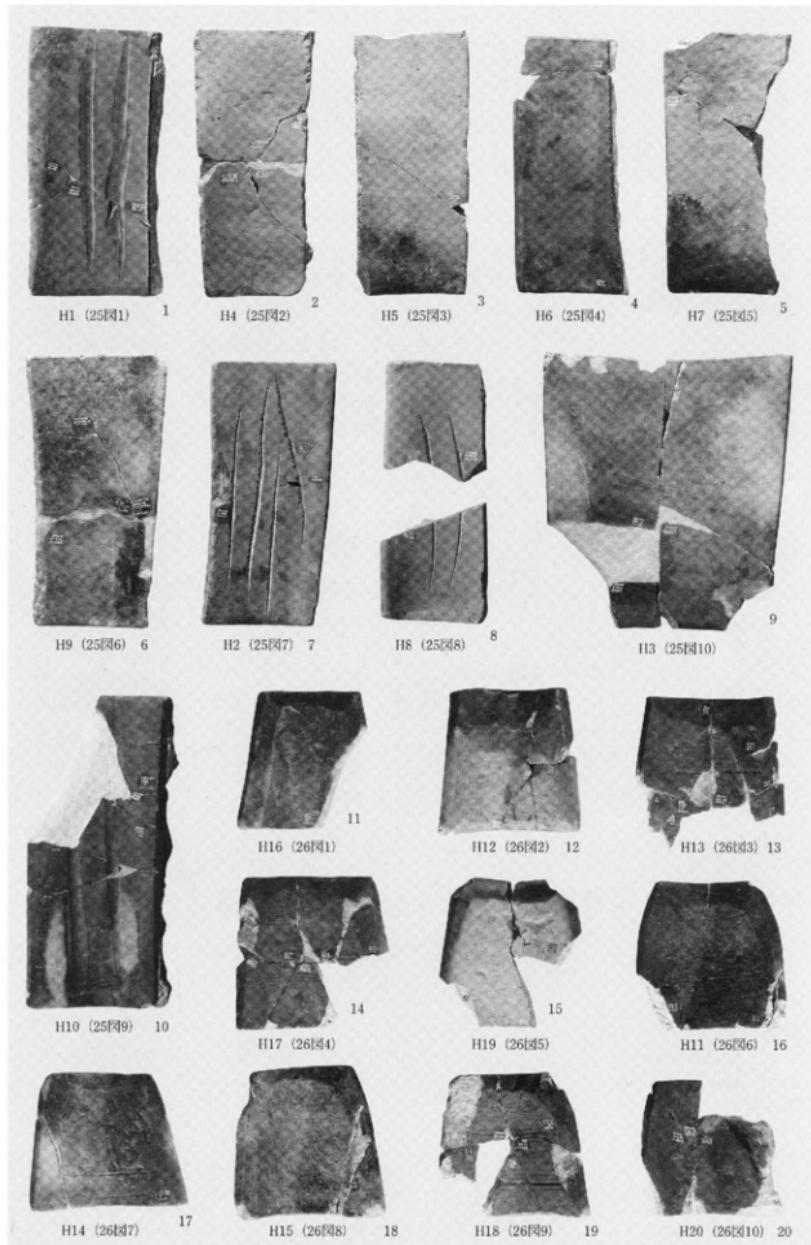
写真図版10 (軒丸瓦・丸瓦)

S=約1/5



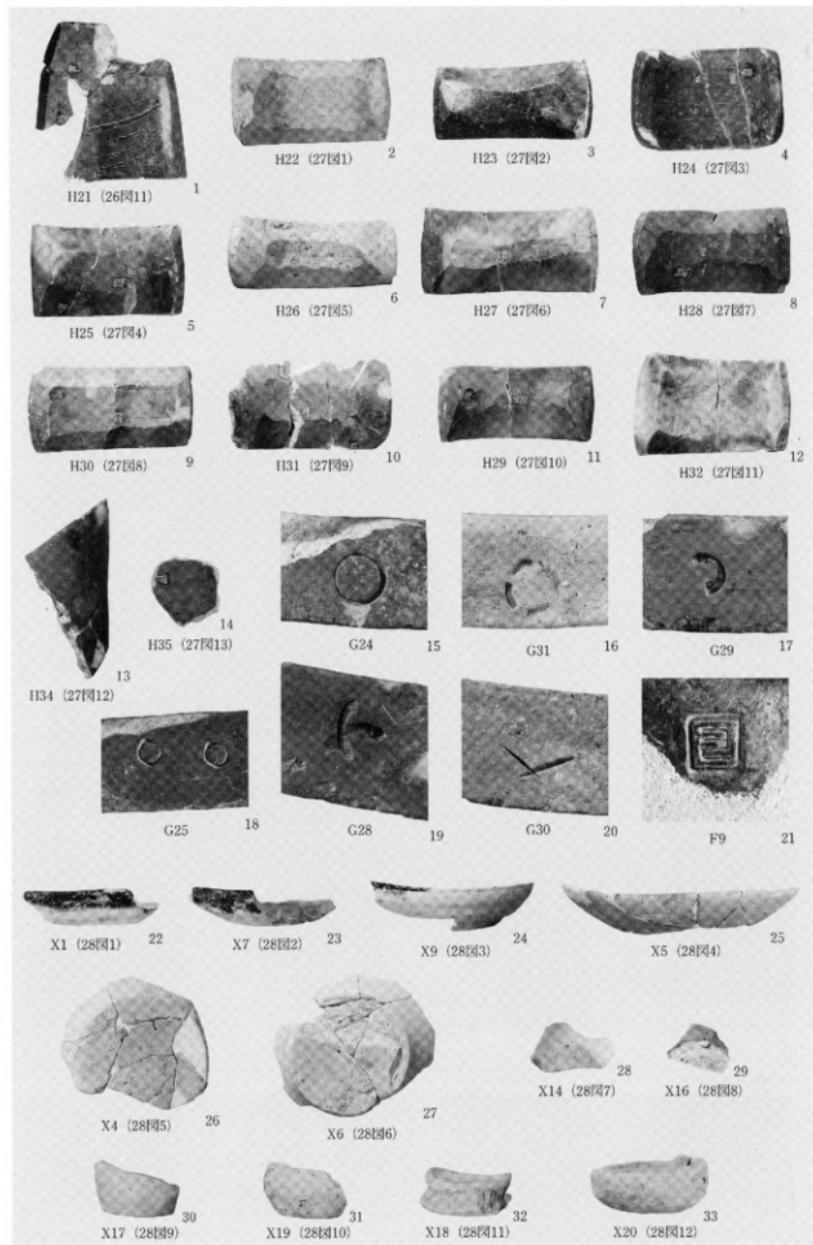
写真図版11 (軒平瓦・平瓦)

S=約1/5



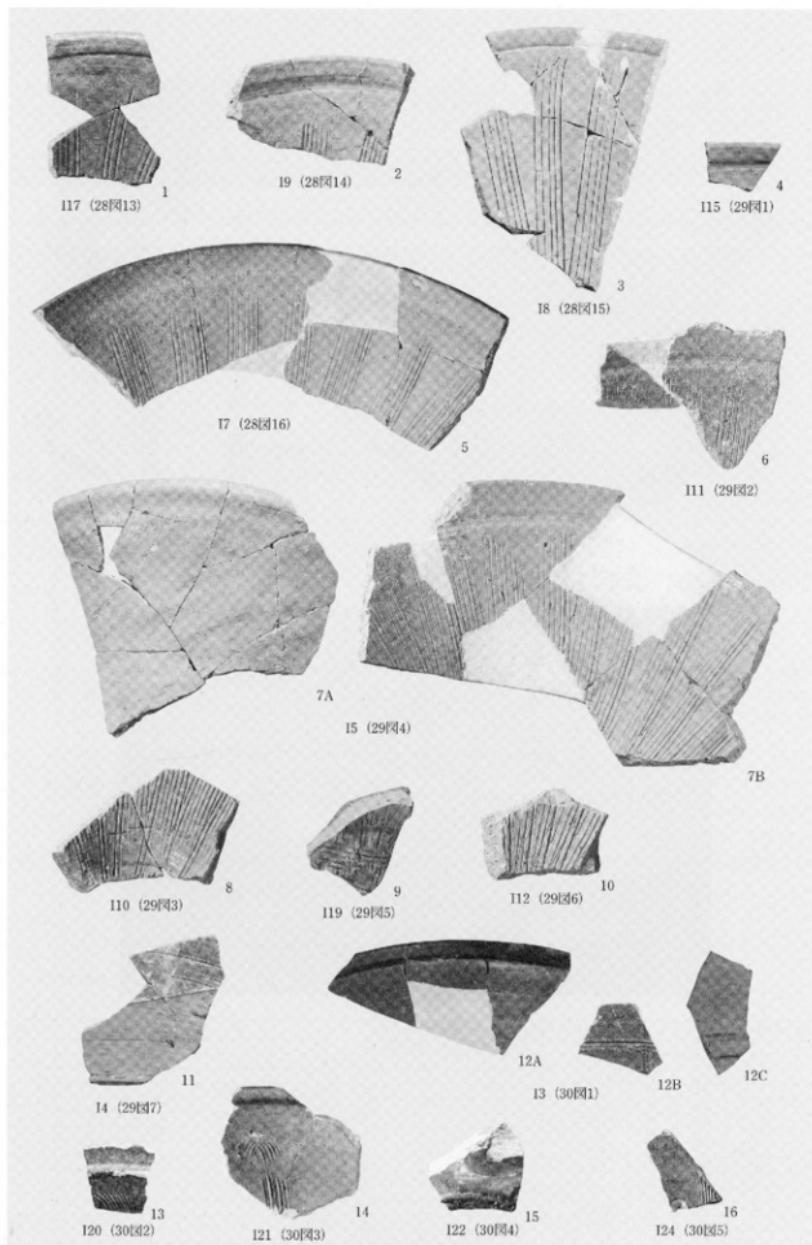
写真図版12 (熨斗瓦・輪違い)

S=約1/5



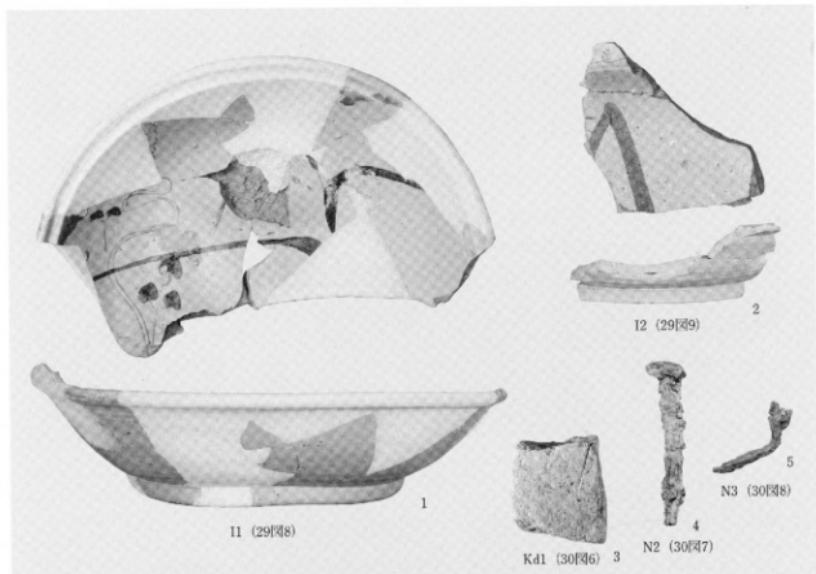
S=1~14: 約1/5、15~21: 約1/1、
22~33: 約1/3

写真図版13 (輪違い・面戸瓦・刻印瓦・土師質土器)

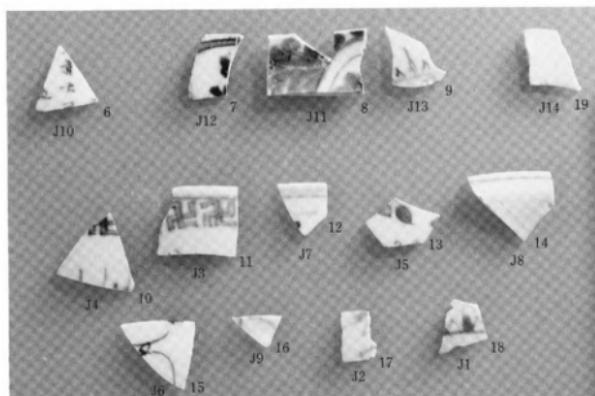


写真図版14 (陶器)

S=約1/3



S=1・2: 約1/3,
3~5: 約1/2



S=約2/3

图示物号	器物名	種	形	器	通量	年	地	時	期	考	考	考
-	J 10	器	小杯	SD34	-	-	中国	新石器時代	青花、文字文			15-6
-	J 12	器	圓小鉢	直曉	-	-	▲	▲	青花、草文			15-7
-	J 11	器	盤?	直曉	-	-	▲	▲	青花、草文?			15-8
-	J 13	器	盤?	直曉	-	-	▲	▲	青花、山形文			15-9
-	J 4	器	碗	直曉	-	-	▲	▲	青花、正文			15-10
-	J 3	器	碗	直曉	-	-	▲	▲	青花、正文			15-11
-	J 7	器	碗	直曉	-	-	▲	▲	青花			15-12
-	J 5	器	碗	直曉	-	-	▲	▲	青花、草文			15-13
-	J 8	器	圓火鍋	直曉	-	-	▲	▲	青花、直邊と捨合			15-14
-	J 6	器	碗	3下火鍋	-	-	▲	▲	青花、(文様不明)			15-15
-	J 9	器	盤	盤反側	3下火鍋	-	▲	▲	青花、(文様不明)			15-16
-	J 2	器	碗	直曉	直曉	-	▲	▲	青花、山形文			15-17
-	J 1	器	碗	直曉	直曉	-	▲	▲	青花、山形文			15-18
-	J 14	器	盤?	直曉	-	-	▲	▲	白磁?			15-19

写真図版15 (陶器・石製品・鉄製品・磁器)

報告書抄録

ふりがな	わかばやしじょうあと							
書名	若林城跡							
副書名	第6次・第7次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第306集							
編著者名	佐藤 淳							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒981-8671 仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL022-214-8893~8894							
発行年月日	2007年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わかばやしじょうあと 若林城跡	宮城県仙台市若林区 古城	04100	01030	38°14'03"	140°54'19"	第6次調査 2006.03.13 2006.04.02 第7次調査 2006.06.01 2006.07.07	450m ² 175m ²	第6次調査 重要遺跡の遺構確認調査 第7次調査
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
若林城跡	城館跡 畠跡 集落跡	古墳～近世		礎石建物跡 石敷造構 畠跡 水路跡 竪穴住居跡	瓦 陶磁器 土師質土器	城の表御殿の建物群 の一部や石敷造構・ 池跡などが発見された		

仙台市文化財調査報告書第306集

若林城跡

— 第6次・第7次発掘調査報告書 —

2007年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区西分町二丁目7番1号
文化財課 TEL. 022(214)8893

印刷 遠山青葉印刷株式会社

仙台市青葉区木町通二丁目5番24号
TEL. 022(272)7371

R100
当紙ハーフ配合率100%再生紙を
使用しています